

ゆ かわ い せき  
湯 川 遺 跡

1997年3月

長野県飯田市教育委員会

ゆ かわ い せき  
湯 川 遺 跡

1997年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市山本地区は飯田市街地の南西部、木曾山脈の前山の麓に位置し、川沿いの平坦地こそ少ないが、比較的広い耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

下伊那地方事務所は、平成7年度から山本地区に農道の新設を計画しました。農道を建設して農業の近代化に対応することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には湯川遺跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、工事実施によって壊されてしまうおそれができました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりであります。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた下伊那地方事務所と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

## 例 言

1. 本書は県単農道整備事業山本地区工事に先立って実施された、長野県飯田市山本「湯川遺跡」の埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成7年度に現場作業、平成8年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・空中測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号としてYKWを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である5287-1を略号に続けて付した。
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址－SB、溝址－SD、土坑－SK
7. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。
10. 本書の編集と執筆は調査員の協議により山下誠一が行った。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。



## 写真図版目次

図版 1	湯川遺跡調査前（南西から） 湯川遺跡調査前（北から）	37
図版 2	SB01 SB01 炉址 SB01 土器出土状態 SB01 土器出土状態 SB01 土器出土状態	38
図版 3	SB02 SB02 炉址 SB02 炉址断ち割り	39
図版 4	SB03 SB03 炉址 SB03 炉址断ち割り SB03 埋設土器 SB03 埋設土器	40
図版 5	SB04 SB04 炉址	41
図版 6	SD01 SD02 SD03	42
図版 7	SD04 SD05	43
図版 8	SK01 SK02 SK03	44
図版 9	SK04 SK05 SK06	45
図版 10	SK07 SK08 SK09	46
図版 11	SK10 SK11 SK12	47
図版 12	北側調査区全景（南西から） 北側調査区全景（北から）	48
図版 13	南側調査区全景（南西から） 南側調査区全景（北東から）	49
図版 14	北側調査区全景（上空から） 北側調査区全景（斜め上空北東から）	50
図版 15	南側調査区全景（上空から） 南側調査区全景（斜め上空北東から）	51
図版 16	SB01 深鉢 SB01 深鉢 SB01 深鉢 SB01 深鉢 SB01 石器 SB02 石器	52
図版 17	SB02 磨製石斧 SB03 石器 SB03 石器 SB04 石器 SK04 石錘 SB06 粗製石匙	53
図版 18	調査スナップ 調査スナップ	54

# I 経 過

## 1. 調査に至るまでの経過

下伊那地方事務所土地改良課は、飯田市山本地区に新設の農道を整備することを計画した。計画路線の延長は3kmにも及び、複数の埋蔵文化財包蔵地を通過することが予想された。そこで、平成6年9月29日に、長野県教育委員会文化課・下伊那地方事務所土地改良課・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、今回の計画路線内に山本地区の埋蔵文化財包蔵地山本・原畑・カニ田・赤羽原・湯川遺跡がかかることが判明した。そこで、遺跡の状況を確認するために試掘調査を実施し、本調査の可否を判断することとした。なお、試掘調査および発掘調査の日程・費用については、事業の進捗状況を見極めながら、下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整をしていくことが確認された。

湯川遺跡の試掘調査は、赤羽原・カニ田・山本西平遺跡（一部）とともに平成7年3月6日から3月15日にかけて実施した。その結果、湯川遺跡と山本西平遺跡の一部に遺構・遺物が認められ、その他は遺跡範囲外であった。そこで、湯川遺跡と山本西平遺跡の一部を本調査の対象として協議を進めていくこととなった。

平成7年度当初から湯川遺跡の本調査の時期と費用について下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成7年5月10日付で発掘調査の委託契約書を取り交わした。なお、整理作業の実施と報告書刊行については平成8年度に実施することとなり、平成8年6月3日付で委託契約書を取り交わした。

## 2. 調査の経過

用地内で調査の土を処理しなければならないことから、2回に分けて調査する必要があった。平成7年5月17日から北側の調査区を重機を使って拡張し、5月23日から作業員を使っての調査を開始する。順次竪穴住居址・溝址等の遺構を検出して出土遺物の取り上げ・写真撮影等の調査を進め、6月2日には炉址の断ち割り委託による遺構測量を除いた作業が終了した。そこで、山本西平遺跡の調査と平行して残りの作業を行い、すべてが終了した6月7日には調査の土を返し南側の調査区を広げるために重機を導入した。作業員を使っての調査は6月12日に再開した。遺構・遺物が比較的少なく、6月20日には現場におけるすべての作業が終了した。その後、図面・写真等の基本的整理を実施して、平成8年3月8日に実績報告書を提出した。

平成8年度は、委託契約書が締結できた6月から作業を再開した。飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2原図の作成・トレース・版組等を行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

### 3. 調査組織

#### (1) 調査

調査担当者	佐々木嘉和	山下 誠一			
調査員	小林 正春	吉川 豊	馬場 保之	吉川 金利	福澤 好晃
	下平 博行	伊藤 尚志	上沼 由彦		
作業員	池田 幸子	市瀬 房吉	市瀬 長年	池戸智恵子	井上 恵資
	氏井 亨	岡島 亘	大原千和喜	小木曾せき	尾曾ちぶき
	奥村 栄子	金井 照子	金子 正子	金子 裕子	唐沢古千代
	北沢 兼雄	北原久美子	吉地 武虎	木下 早苗	木下 傳
	木下 千秋	木下 玲子	櫛原 勝子	黒川 嘉雄	小池千津子
	小平不二子	小平 峯子	小林 千枝	小室 睦子	斉藤 薫
	斉藤 徳子	左近美智子	酒井 優子	榊原 政夫	桜井かのへ
	佐々木真奈美	佐々木美千枝	佐々木 阜	佐藤知代子	島崎美保江
	斯波 幸枝	代田 和登	菅沼和加子	鈴木 重雄	関島真由美
	滝上 正一	仲村 信	鶴岡 照儀	服部 光男	林 達郎
	林 悟史	林 政人	平栗 陽子	樋本 宣子	福沢 育子
	福沢 幸子	福本 静雄	福本まさ志	福沢 誠	藤本 宏
	古根 素子	細田 七郎	細田 光彦	牧内喜久子	牧内 八代
	松井 明治	牧田 許江	松下 金誉	松下 友彦	松下 節子
	松下 光利	松田 猛	松村かつみ	三浦 厚子	南井 規子
	森藤美知子	山田 康夫	吉川 和夫	吉川紀美子	

#### (2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課（平成8年6月30日まで）

同博物館課（平成8年7月1日から）

横田 穆（社会教育課長）  
 小林 正春（ " 文化係長）  
 吉川 豊（ " 文化係）  
 山下 誠一（ " " ）  
 馬場 保之（ " " ）  
 吉川 金利（ " " ）  
 福澤 好晃（ " " ）  
 下平 博行（ " " ）  
 伊藤 尚志（ " " ）  
 岡田 茂子（ " 社会教育係）

矢沢 与平（博物館課長）  
 小林 正春（ " 埋蔵文化財係長）  
 吉川 豊（ " 埋蔵文化係）  
 山下 誠一（ " " ）  
 馬場 保之（ " " ）  
 吉川 金利（ " " ）  
 福澤 好晃（ " " ）  
 下平 博行（ " " ）  
 伊藤 尚志（ " " ）  
 牧内 功（ " 庶務係）

## Ⅱ 遺跡の環境

### 1. 自然環境

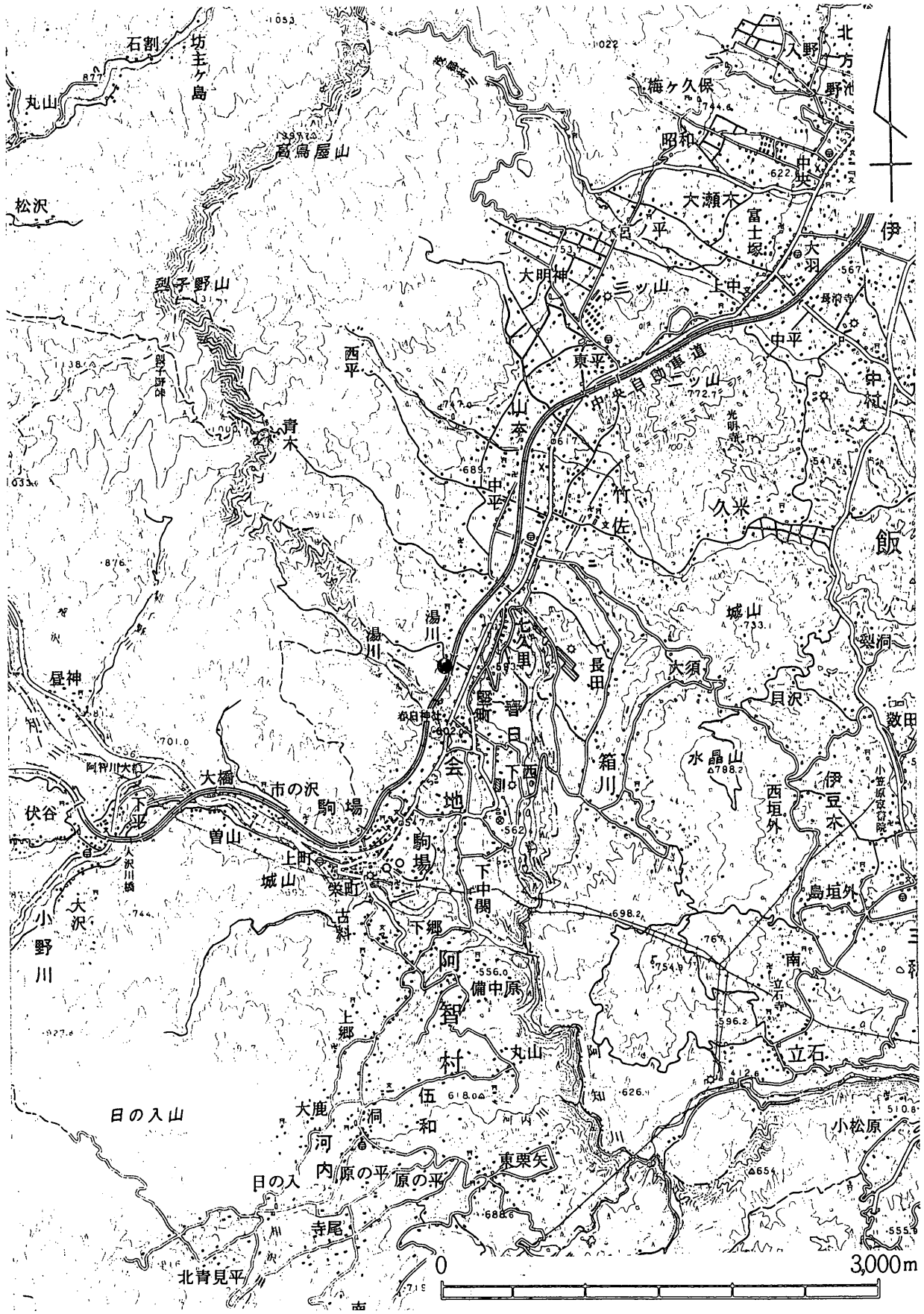
山本地区は飯田市西部にあり、飯田市市街地の南西に位置する。北側は飯田市伊賀良地区、東側は飯田市三穂地区に、南側は下伊那郡阿智村に接する。

飯田市は赤石山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷の南端に当たり、両山脈の間を天竜川が南流する。地形的には天竜川に平行する河岸段丘を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。飯田市の大半は、下伊那郡松川町から飯田市の国指定名勝である天竜峡までの細長い飯田盆地にある。

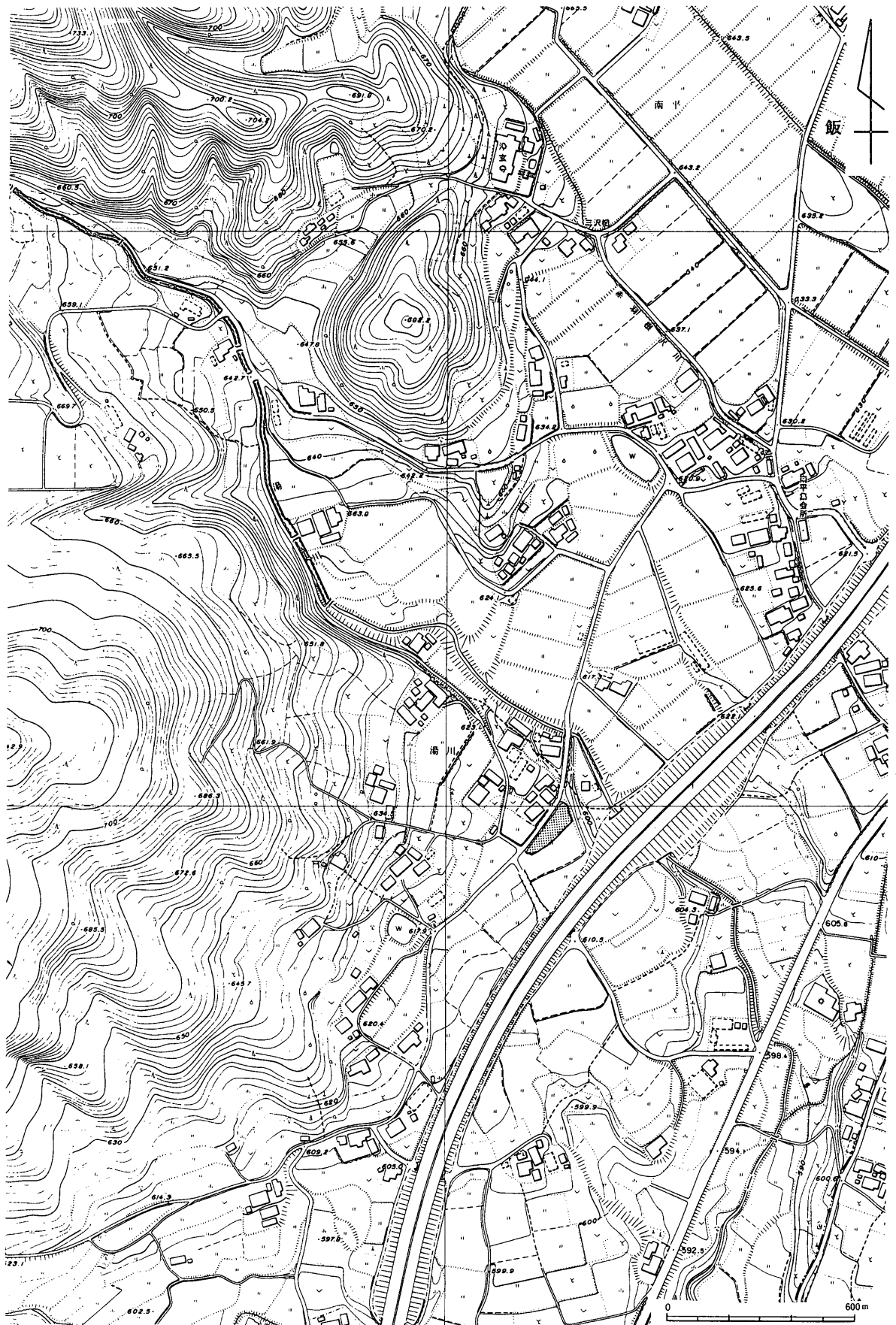
山本地区の場合、飯田盆地とは二ツ山・城山・水晶山などの丘陵によって隔たった阿智盆地の一部である。この両盆地を分ける丘陵は、緩やかな曲線を描きながら南北に並び、この丘陵と木曾山脈の山麓にはさまれて、ほぼ南北に細長く続くのが阿智盆地である。木曾山脈前山から阿知川に流れ出す湯川・箱川や天竜川支流の久米川によって形成された扇状地が発達しているが、地区北側の大明神原を除いては、規模は大きくない。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は、現在は堆積作用より浸食作用に転じているが、浸食力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。台地状の小丘陵として残っているところが各所に分布し、南東の方向にのびている。山麓の扇状地や小河川に面したところに耕地が展開し、集落も国道153号沿いの街村を除いては、同様な立地を呈している。近年にいたって、扇状地の上部や東にのびる台地上や数条に走る断層崖によって生じた崖錐面にも開拓が進み、集落が発達しつつある。なお、山本地区は飯田市の中では標高が高く、特に冬季の生活環境は厳しいものがある。

湯川遺跡は飯田市山本地区南部にあたり、木曾山脈前山より流れ出した湯川の扇状地上に立地している。遺跡北側を扇状地を浸食して湯川が南東方向に流れている。その浸食谷の規模は小さいが、比高差15mを測る崖となっており、その台地縁に遺跡が展開している。北西側は急な坂となって前山に続いている。湯川をはさんだ北側が赤羽原遺跡・南側は日丁遺跡が隣接する。今次調査地は湯川遺跡の中央部に位置し、南東側に緩く傾斜する台地上に立地している。現状は傾斜を造成して水田としており、かなり地形改変を受けている。





挿図1 湯川遺跡位置図 (1 : 50, 000)



挿図2 湯川遺跡調査位置図及び周辺図 (1:5,000)

## 2. 歴史環境

山本地区には埋蔵文化財包蔵地が広く分布しているが、これまで発掘調査された遺跡は市内他地区と比べると比較的少ない。そのなかで、中央自動車道西宮線建設に先立つ柳田・山田・石子原遺跡、石子原古墳、工場建設・農道新設に伴う箱川原遺跡、小学校新設による白山遺跡、ほ場整備にかかる高野遺跡等の各遺跡がある。

こうした文化財に表された先人達の足跡は旧石器時代までさかのぼる。昭和47年に調査された石子原遺跡のローム層の中から、チョッパー、スクレイパー、チョッピング・ツール等の旧石器時代前期末と考えられる石器群が出土した（長野県教育委員会1973B）。当初からその位置づけには様々な論議がみられたが、現在では今から28,000年前後の年代が与えられている。

続く縄文時代では、石子原遺跡での早期押型文土器が最も古い時代のものであり（長野県教育委員会1973A）、白山遺跡（飯田市教育委員会1981）・箱川原遺跡（下伊那誌編纂会1991）・柳田遺跡（長野県教育委員会1973A）等からの中期の竪穴住居址がそれに続く。いずれも狭い範囲での調査にとどまったために、必ずしも全体が明らかになったわけではないが、調査範囲外にさらに多数の竪穴住居址等が存在すると考えられる。出土遺物の面では、箱川原遺跡から出土した顔面付の釣手土器・有孔罎付土器は注目される。中期に続く後期・晩期の様相は明らかではないが、遺跡が減少する当地方の状況と同様な傾向を示すと考えられる。

弥生時代においては、前期・中期と後期では遺跡立地が異なり、前者は天竜川に近い低位の段丘面を主な生活域としている。後者になると、高位の段丘面や扇状地に遺跡が拡大する。山本地区では竪穴住居址は発見されていないが、各所で後期の集落が営まれていたことは確実である。

古墳は山本地区では13基が確認されているが、現存するものは3基にすぎない。古墳が密集する低位段丘面の座光寺・上郷・松尾・竜丘地区に比べると著しく少なく、隣接する三穂地区と比べても少ない。発掘調査された古墳には石子原古墳があり、墳丘から4基の埋葬施設が検出され、出土遺物から6世紀初頭の年代が与えられている（長野県教育委員会1973A）。また、隣接する石子原遺跡からは3基の方形周溝墓が発見された。時期を決定する遺物に欠け、その时期的な位置づけを特定するには困難が伴うのであるが、古墳との関連を想定して古墳時代に位置づく可能性が高い。周溝墓に関する特筆すべき事項とすれば、2号周溝墓主体部から炭が認められ、その後上郷黒田垣外遺跡で調査した『木炭棺』からみて（上郷町教育委員会1989）、同様な施設であった可能性が高い。また、1号周溝墓からはガラス小玉が出土した。こうした墓域を形成した集落の様相は不明であるが、地区内に存在したことは確実であり、その検出は今後の課題となる。調査された竪穴住居址は、高野遺跡の古墳時代前期に位置づくものが1軒のみである（飯田市教育委員会1989）。

奈良時代については、伊賀良中村地籍にまたがる久米地区の高野遺跡から、その終末に位置づく竪穴住居址・掘立柱建物址・製鉄工房址が調査されている（飯田市教育委員会1989）。これらは遺跡近くにある天平年間創建と寺史にある名刹光明寺との関連が考えられている。ほかには該期の遺構は調査されておらず、特に広い範囲を占める山本地区の状況は不明である。しかし、隣の阿智村からの経路を考慮すれば、古代東山道が通過していたと考えられ、集落等の存在も予想される。今後の調査によって、こ

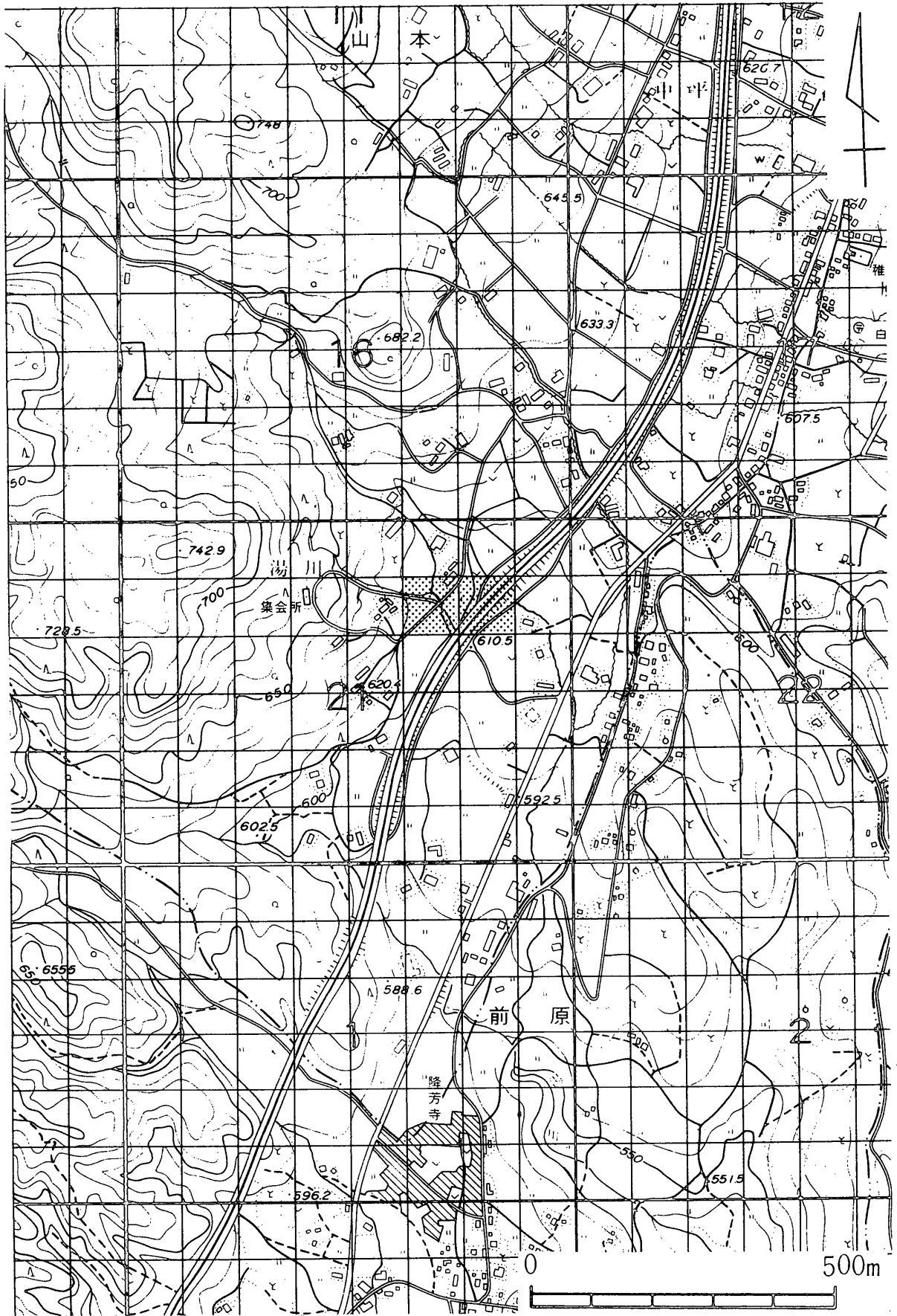
の時代の様相もより具体的な姿が明らかになるといえる。

平安時代はその前半については奈良時代と連続的に把握することが可能と考えられる。また、前述した光明寺の国指定の重要文化財に指定されている薬師如来座像には、胎内に保延六年（1140年）の銘を持っている。地区の平安時代の様相を具体的に示す事項といえる。しかし、前時代と同様に、発掘調査によって現れた具体的な姿はほとんど見られない。

中世においては、久米ヶ城・西平城・麦種城・茶臼ヶ城の4箇所で山城の築造が行われている。発掘調査によっては、大塚遺跡から火葬墓群が発見されており、埋葬形態の一端をかいま見ることができる（下伊那考古学会1966）。

終わりに、湯川遺跡の発掘調査について触れておきたい。今回の調査地点から50m程南東側の地点が柳田遺跡として中央自動車道西宮線建設に先立ち発掘調査され、縄文時代中期の竪穴住居址2軒・土坑10基、中世の溝址1本が発見された（長野県教育委会1973A）。今次調査地点と同一の遺跡範囲内と考えられる。平成4年度に飯田市教育委員会が実施した山本地区の詳細分布調査によって名称を湯川遺跡で統一しており、今回の調査も湯川遺跡の名称で行っている。





挿図3 基準メッシュ図区画及び調査位置 (1 : 10, 000)

### Ⅲ 調査結果

#### 1. 調査の方法と概要

調査対象地の調査前は水田として利用されており、廃土の処理は用地内で済ませる必要があった。そこで、まず北側半分の調査を行い、廃土を返して南側を発掘するように計画した。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、(株)ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡 三尋石(Ⅱ)遺跡』(飯田市教育委員会1996)に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3で示したようにLC93 21-14・21-15である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

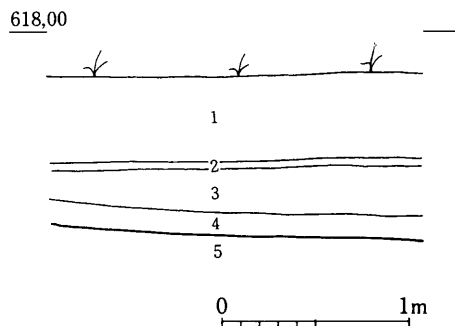
竪穴住居址……………4軒  
溝 址……………5本  
土 坑……………12基  
柱 穴・穴……………多数

#### 2. 基本層序

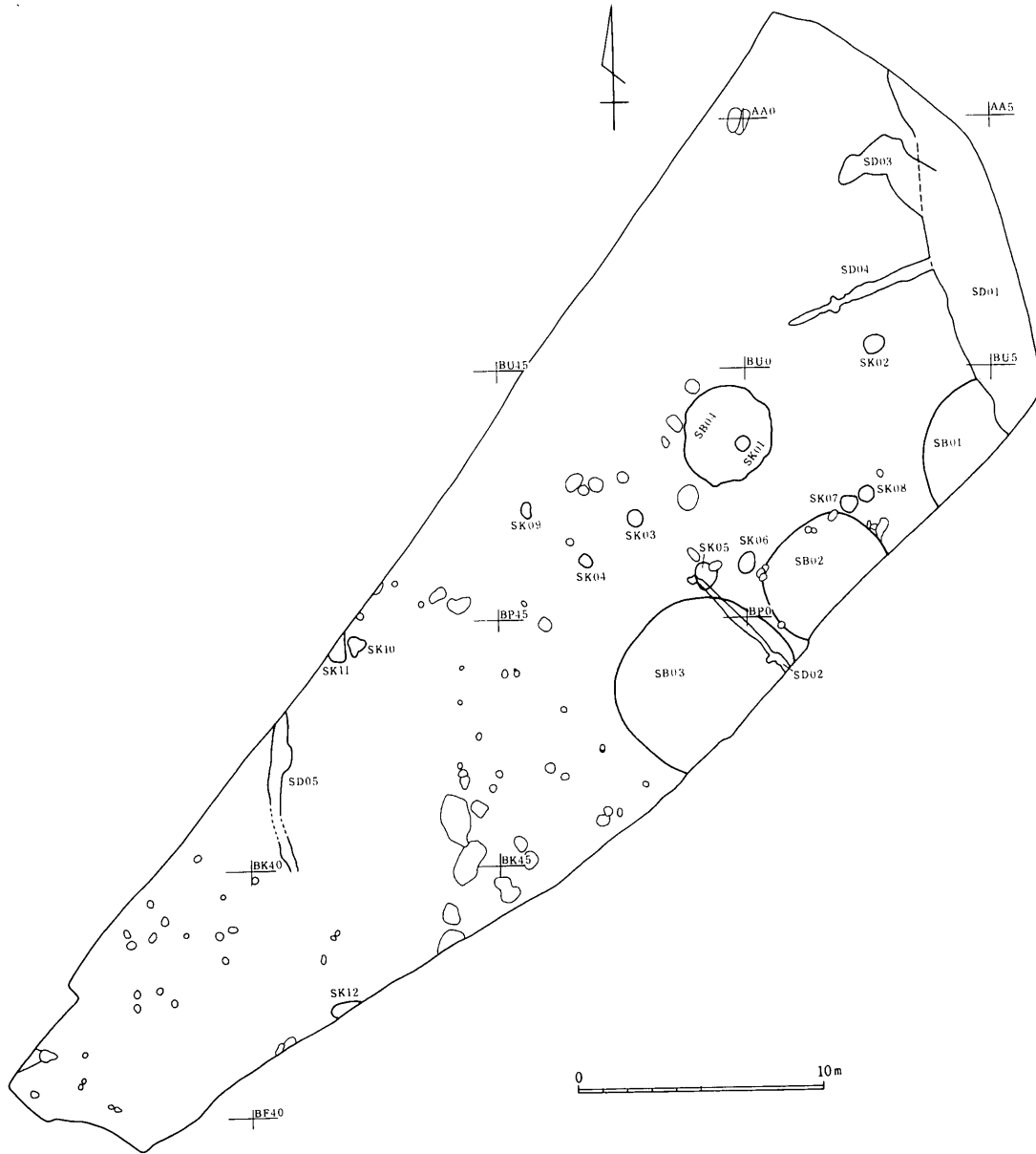
水田による造成を受けており、比較的残りの良い東側SB3南側の東に面する壁面の層序を挿図4で示した。

- 1層：褐灰色土(10YR4/1)、水田耕土
- 2層：灰黄褐色土(10YR4/2)鉄分・マンガン沈殿、水田床土
- 3層：黒褐色土(2.5YR3/2)
- 4層：暗褐色土(10YR3/3)
- 5層：黄褐色土(10YR5/8)

遺構検出面は基盤である5層上面で比較的容易に遺構は検出できた。遺構覆土の粘性が強いため、遺物特に土器の器面を荒らす原因となった。



挿図4 湯川遺跡基本土層図



挿図5 湯川遺跡遺構全体図 (1 : 300)

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居址

##### ① S B 0 1 (挿図6、第1・2・3図、図版2・16)

**遺構** 調査区北東端B S 4を中心にして検出した。中世のS D 0 1に切られ、南側が用地外のため全体の1/4程を調査した。規模不明の円形の竪穴住居址で、主軸方向は炉址の位置からN25° Wを示す。壁高は27～13cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝は壁下を巡り、幅30～14cm・深さ12～8 cmを測る。また、その内側にも長さ50cm・幅18～12cm・深さ23～12cmの周溝が認められた。床面は黄褐色土層に明確に検出されたが、全体に軟らかく不良である。壁際がわずかに高くなっていた。支柱穴はP1・P5で、P6・P7は旧住居址に伴うと考えられる。炉址は北壁寄りに位置する切りゴタツ状の石囲炉で、規模は152×125cmを測る。底部には顕著な焼土が認められる。炉石は住居址廃棄時に抜かれていて、北側の石3個のみが残る。炉址の南側に焼土があり、旧住居址の炉址に関係するものと考えられる。周溝や支柱穴・炉址の状況から1回の建て替えが想定される。

**遺物** 土器・石器がある。出土状態は、床面からそのやや上層に礫とともに入っていた。土器は深鉢があり、図上復元できた1-1は、器面が荒れてほとんど文様の確認はできないが、地文に縦位の細かい条線文が施文されるのがわずかに確認できる。図化資料のうち4点(1-2～4、2-27)も同様な地文を持つ。拓影で示した個体にも同じ地文が施される例が多い。石器は打製石斧(3-1・2)、すり石(3-3)がある。

出土遺物と遺構形態から縄文時代中期後葉に位置づけられる。

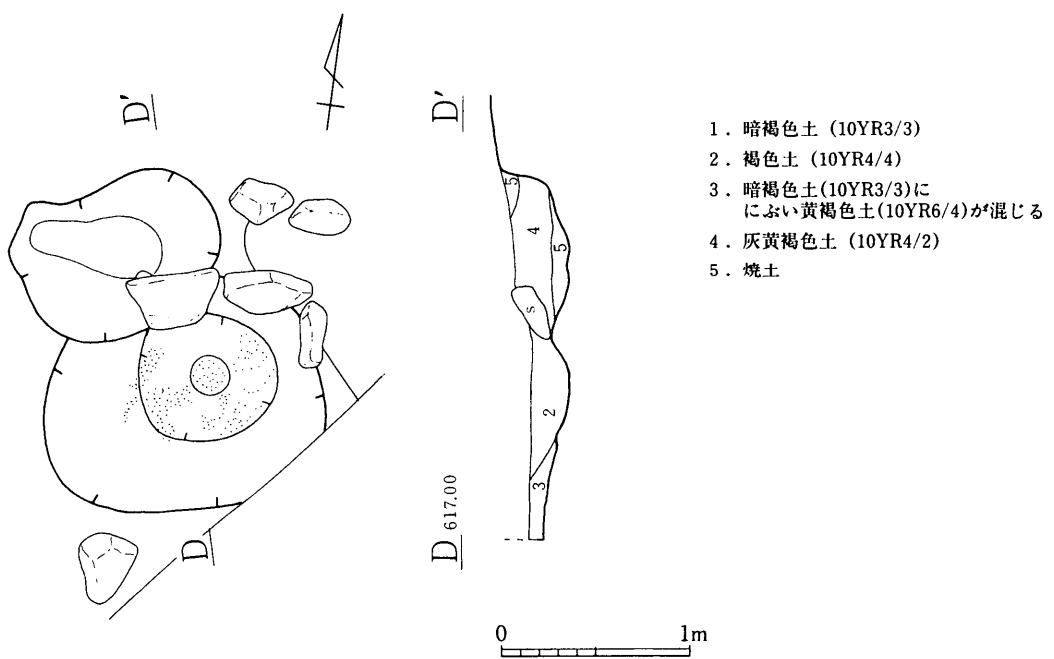
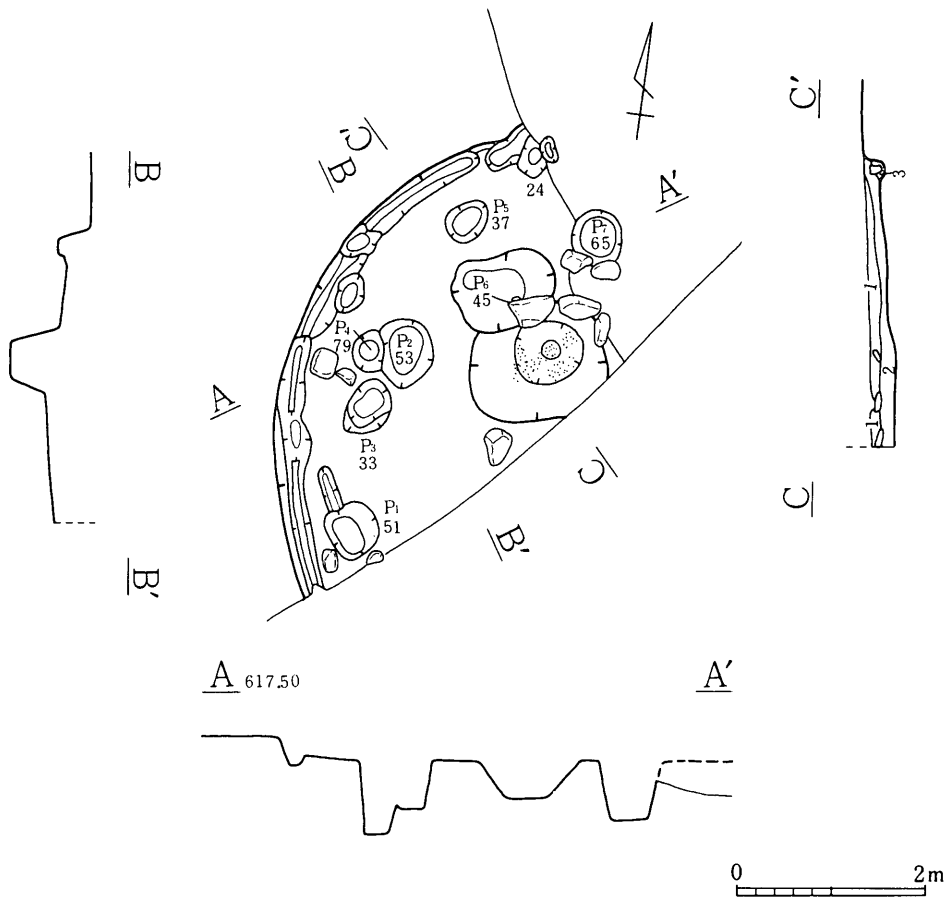
##### ② S B 0 2 (挿図7、第3・4図、図版3・16)

**遺構** 調査区東側B P 1を中心にして検出し、南東側が用地外のため全体の3/4程を調査した。主軸に直交する方向が5.2mの丸みを帯びた隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は炉址の位置からN40° Wを示す。壁高は31～19cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は黄褐色土に明確に検出されたが、全体に軟らかく不良である。壁際から中央部にわずかに傾斜していて、支柱穴の内側の範囲位が平坦である。支柱穴はP1～P3で、いずれも床面からやや掘り下げた位置に石が入れられていた。北東側の1本は用地外のために確認できないもので、4本支柱穴をなす。炉址は北西壁寄りに位置する切りゴタツ状の石囲炉で、規模は84×87cmを測り、石は抜かれて残っていない。壁面が焼けて焼土が顕著に認められたが、底部には余り焼土はみられなかった。底部直上には10cm程の炭層が確認できた。

**遺物** 土器・石器があるが、出土量は少なく、覆土中に顕著な集中箇所はみられなかった。土器は深鉢(3-4～29)があり、時期差を含んでいる。石器は打製石斧(4-1～8)・横刃型石器(4-9)・磨製石斧(4-10)がある。

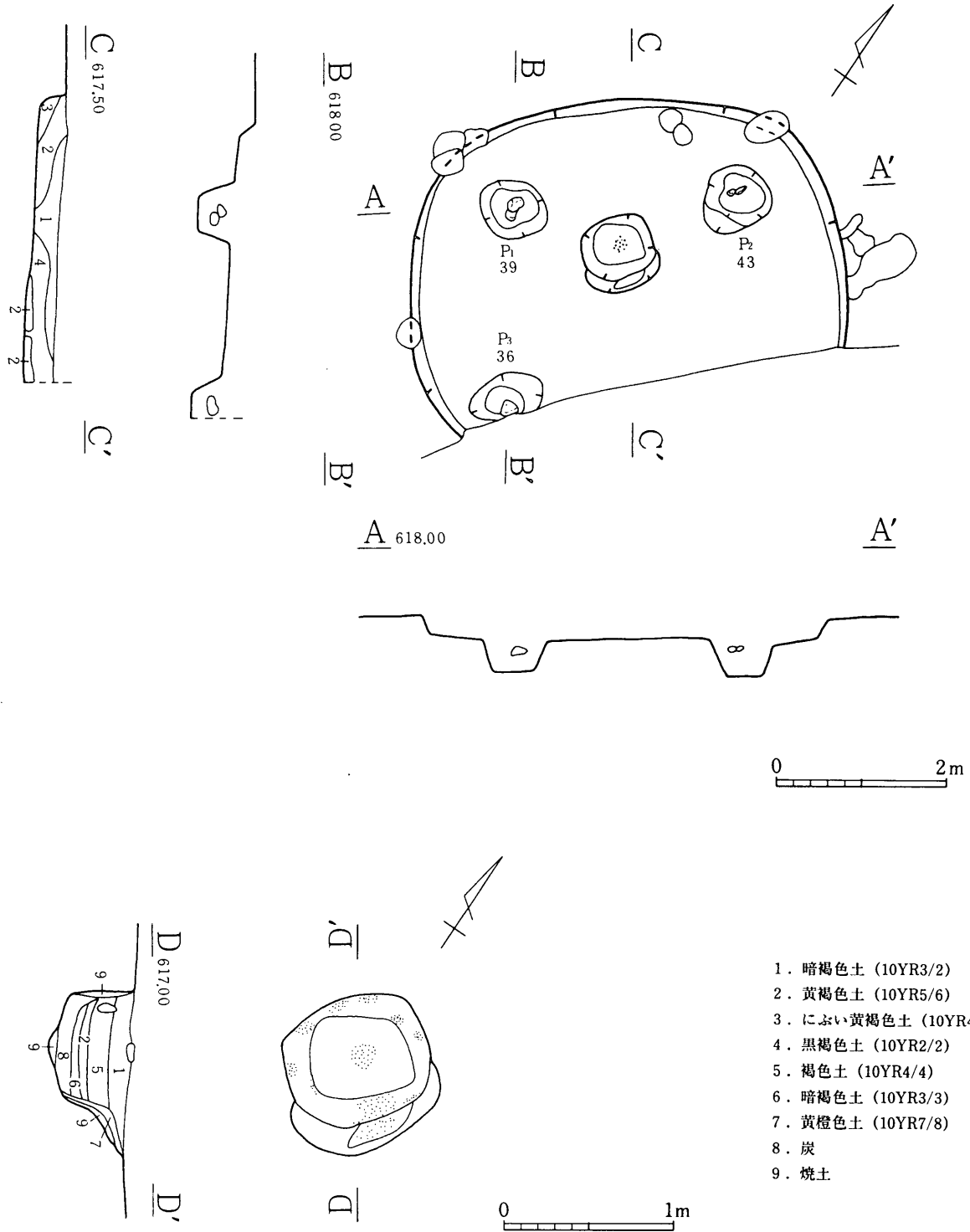
出土遺物と遺構形態から縄文時代中期後葉に位置づけられる。





- 1. 暗褐色土 (10YR3/3)
- 2. 褐色土 (10YR4/4)
- 3. 暗褐色土(10YR3/3)に  
におい黄褐色土(10YR6/4)が混じる
- 4. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 5. 焼土

挿図6 SB01



1. 暗褐色土 (10YR3/2)
2. 黄褐色土 (10YR5/6)
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
4. 黒褐色土 (10YR2/2)
5. 褐色土 (10YR4/4)
6. 暗褐色土 (10YR3/3)
7. 黄橙色土 (10YR7/8)
8. 炭
9. 焼土

挿図7 SB02

③ S B 0 3 (挿図8、第4・5・6図、図版4・17)

**遺構** 調査区東側BN49を中心にして検出し、SD02に切られる。南東側が用地外のため全体の3/4程を調査した。主軸方向が7.0mの円形の竪穴住居址で、主軸方向は炉址の位置からN34°Eを示す。壁高は25～6cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は黄褐色土層に明確に検出されたが、全体に軟らかく不良である。周溝が西側では三重に、北側では二重に巡り、2回の建て替えが想定される。当初5.3mの規模であったものを、南・西側に広げて6.0mとし、さらに西側に拡張して7.0mとなったと考えられる。主柱穴はP2・P3・P4・P5で、P9・P11は旧住居址、P10・P7は最初の住居址に付属する。炉址は北東壁寄りに位置する石囲炉で、規模は1.6×1.2m程を測り、西側の石5個が本来の位置に残るのみである。焼土は余り多くなく、範囲は明確に検出できなかった。炉址の下層には直径60cm程の穴があり、断ち割り調査時の土層観察から、旧住居址に付属すると判断した。炉址南側と西側の二箇所にも床面を掘り窪めて小型の土器が埋設されていた。

**遺物** 土器・石器があるが、出土量は少ない。土器は深鉢があり、5-1～3は同一個体である。拓影で示した破片の中では縄文を地文とするものが多い。石器は打製石斧(6-1～5)・横刃型石器(6-6)・使用痕のある剥片(6-7)がある。

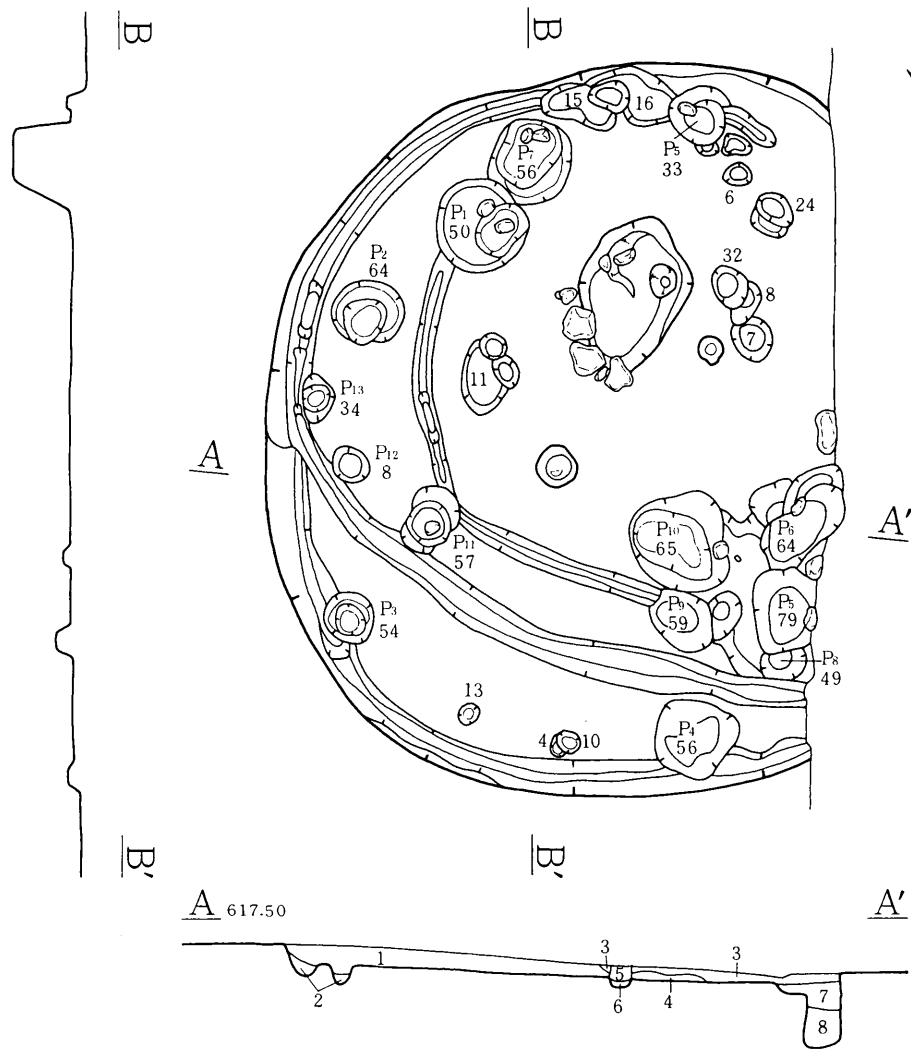
出土遺物と遺構形態から縄文時代中期後葉に位置づけられる。

④ S B 0 4 (挿図9、第6図、図版5・17)

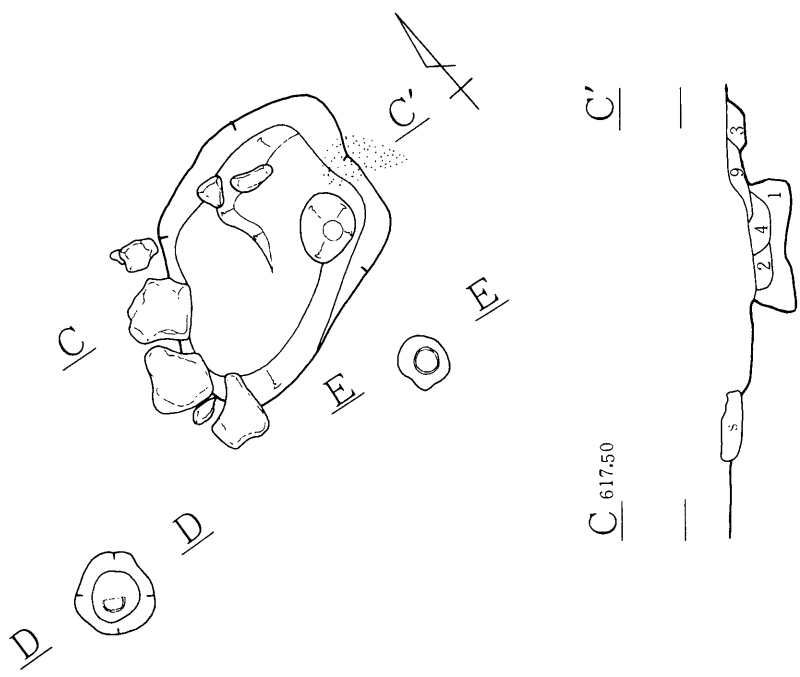
**遺構** 調査区北側中央部BS49を中心にして検出し、全体を調査した。SK01に切られる。4.1×3.6mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN16°Eを示す。壁面は水田の造成で削平されていてほとんど残っておらず、壁高は5cm以下である。周溝は小穴を伴って壁下を全周し、幅36～12cm・深さ28～3cmを測る。床面は黄褐色土層に明確に検出され全体に堅いが、基盤が粘質が強く堅いため、床面として堅くなったものではない。主柱穴はP1・P2・P3・P4で、P5は入り口に関連すると考えられる。炉址はほぼ中央部に位置する切りゴタツ状の石囲炉で、規模は114×90cmを測る。底部には顕著に焼土が認められて、炉石は住居址廃棄時に抜かれていて、数個の石が散乱した状態で残る。壁面の状況から石が置かれていた位置は特定できる。炉址から入り口部の床面上に4個の石が認められ、炉址の石である可能性を指摘しておく。

**遺物** 土器・石器があるが、極めて少ない。土器は深鉢(6-8～12)があり、石器は打製石斧(6-13)・使用痕のある剥片(6-14)がある。

出土遺物が少なく確定した時期を示すことは不可能であるが、遺構形態から縄文時代中期後葉に位置づけられる。

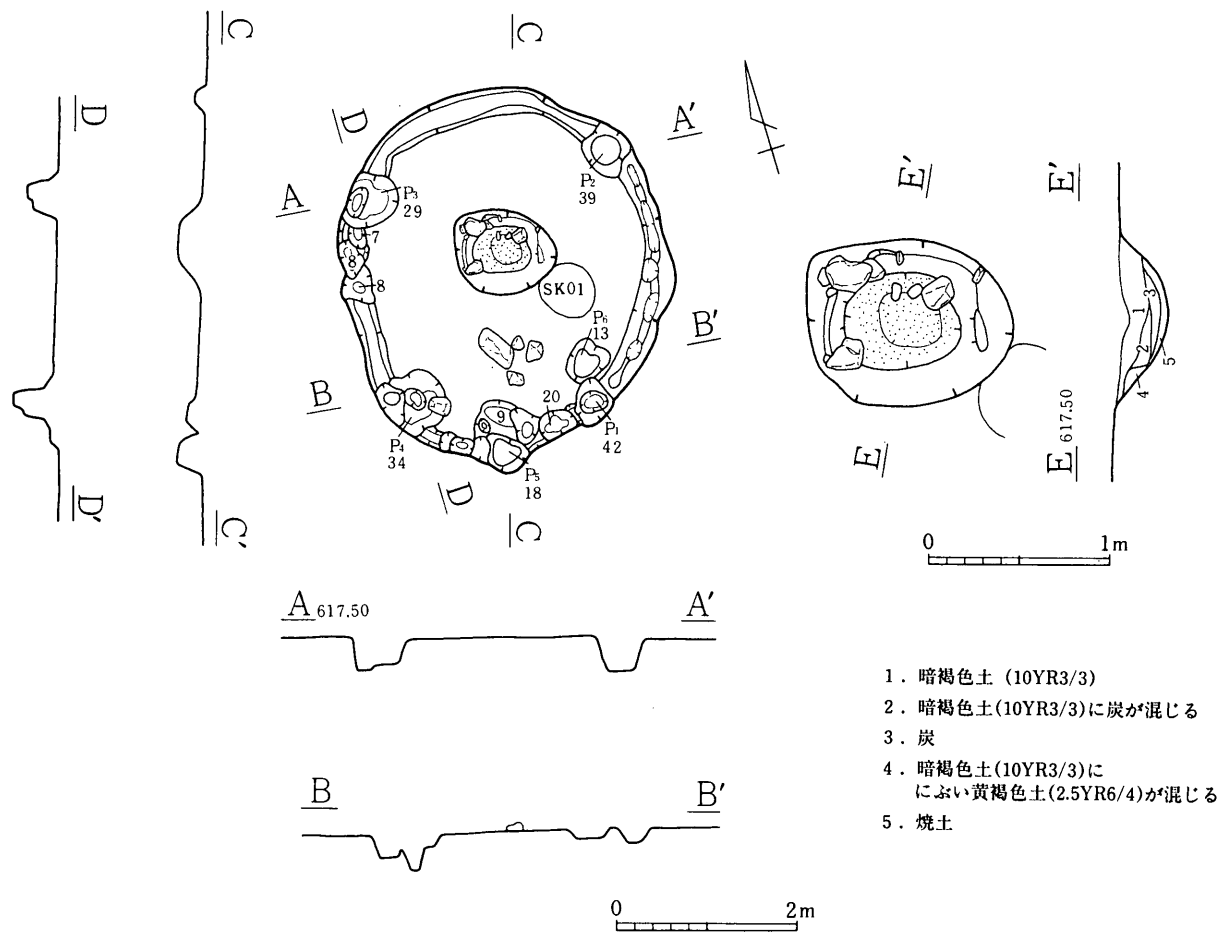


1. 暗褐色土 (10YR3/3)
2. 暗褐色土(10YR3/3)に  
 におい黄褐色土(10YR6/3)が混じる
3. 暗褐色土(10YR3/3)に  
 灰黄褐色土(10YR4/2)が混じる
4. 黄褐色土 (10YR5/6)
5. 黒褐色土 (10YR3/2)
6. 黒褐色土(10YR3/2)に  
 黄褐色土(10YR5/6)が混じる
7. 暗褐色土 (10YR3/4)
8. 暗褐色土(10YR3/4)に  
 ローム粒が混じる
9. 焼土
10. 攪乱



挿図8 SB03





挿図9 SB04

## (2) 溝 址

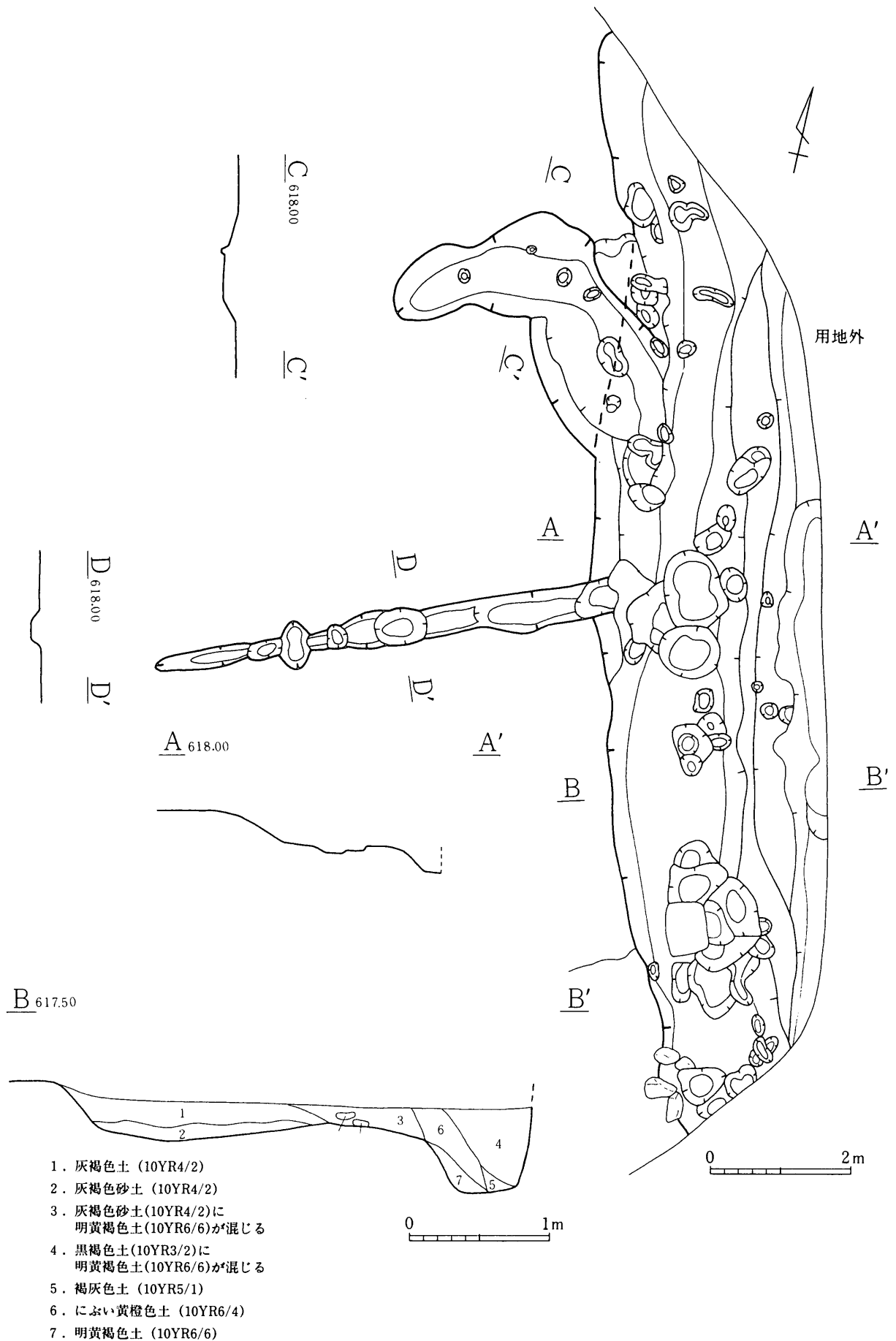
### ① SD01 (挿図10、第6・7図、図版6)

**遺構** 調査区の北端BT5～AA3にかけて検出した。調査延長は15.4mで、北・南側に延長する。東側用地外にかかる落ち込みは、土層から埋められていることが確認され、本址を切る。覆土は砂を主体としており、方向はN14°Wを示す。幅2.2～1.6m・深さ88～46cmを測り、断面形は不定形で、水流によって抉られた箇所が認められる。

**遺物** 出土遺物は少ない。縄文土器深鉢片35点、分銅形打製石斧(7-1)・打製石斧(7-2・3)・横刃型石器(7-4)黒曜石剥片、常滑(6-15)・山茶碗(6-16～18)等がある。

出土遺物の主体を占める縄文土器・石器は周辺からの流れ込みによるものといえ、最も新しい陶器類から中世に位置づけられる。

遺構の状況から用水路と考えられる。



挿図10 SD01・03・04

② S D 0 2 (挿図11、第7図、図版6)

**遺構** 調査区の中央部BN5～BP48にかけて検出した。縄文時代中期のSB03を切る。調査延長は5.4mで、南東側用地外に延長する。北西側は確認できないが、水田の造成で削平されたため、本来は続いていたと考えられる。覆土は砂を主体としており、方向はN44°Wを示す。幅40～12cm・深さ25～5cmを測り、断面形は不定形で、水流によって抉られた箇所が認められる。

**遺物** 出土遺物は極めて少なく、打製石斧(7-5)等がある。

出土遺物が少なく確定した時期を示すことは不可能である。

遺構の状況から自然の小沢川の流路である。

③ S D 0 3 (挿図10、第7図、図版6)

**遺構** 調査区の北側BX2～BX3にかけて検出した。調査延長は4.4mで、東側は中世のSD01と重複する。西側は確認できないが、水田の造成で削平されたため、本来は続いていたと考えられる。覆土はほぼSD01と共通していた。幅1.8～0.8m・深さ35～5cmを測り、断面形は不定形で、水流によって抉られた箇所が認められる。

**遺物** 出土遺物は極めて少なく、凹石(7-6)等がある。

出土遺物が少なく確定した時期を示すことは不可能だが、覆土の共通性や遺構の状態からSD01と関連する可能性が高い。

④ S D 0 4 (挿図10、第7図、図版7)

**遺構** 調査区の北東側BU0～BW3にかけて検出した。調査延長は6.6m東側で中世のSD01に切られ、西側では確認できない。方向はほぼ直線的で67°Eを示し、幅60～24cm・深さ20～3cmを測り、断面形は逆台形をなす。

**遺物** 出土遺物は極めて少なく、打製石斧(7-5)等がある。

出土遺物が少なく確定した時期を示すことは不可能である。

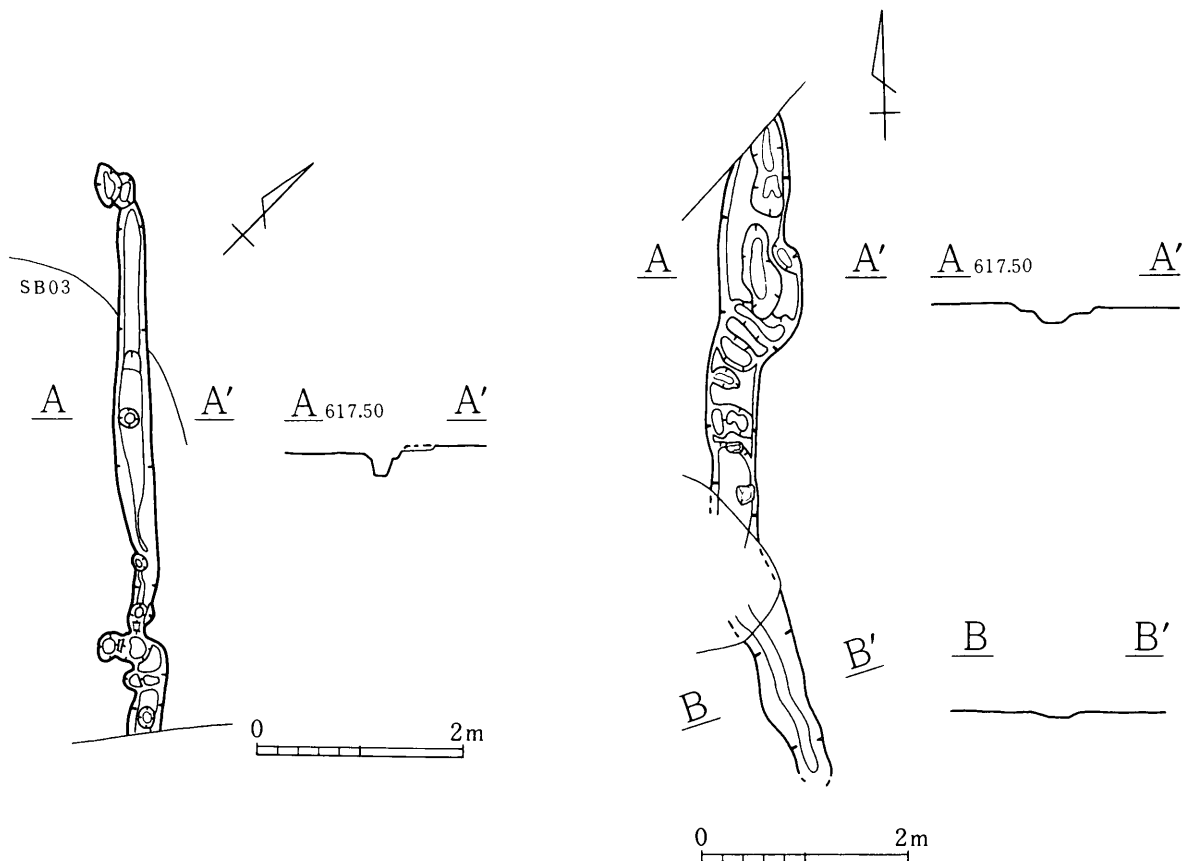
⑤ S D 0 5 (挿図11、図版7)

**遺構** 調査区の西側BJ40～BM40にかけて検出した。調査延長は6.3mで、北側用地外に延長する。南側は確認できないが、水田の造成で削平されたため、本来は続いていたと考えられる。覆土は砂を主体としており、方向はN2°Wを示す。幅80～30cm・深さ24～5cmを測り、断面形は不定形で、水流によって抉られた箇所が認められる。

**遺物** 出土遺物は極めて少なく、図示できる遺物はない。

出土遺物が少なく確定した時期を示すことは不可能である。

遺構の状況から自然の小沢川の流路である。



挿図11 SD02・SD05

### (3) 土坑・柱穴・穴

土坑は番号を付したものが12基あり、個々の説明は省略して一覧表で表した。土坑と穴の区別であるが、遺物が出土したり遺構に規格性が認められたら土坑とし、それ以外は穴と考えた。30cm前後以下ので柱が埋められていたと考えられるものは柱穴とした。しかし、それぞれの区別は厳密にはできておらず、今後の調査に課題を残した。

土坑の分布状況は、竪穴住居址がある調査区北側に多く、特にSB03北西側の箇所やや集中する傾向が認められる。竪穴住居址とSK01を除いて重複する例はなく、ある程度場所が選ばれていることが考えられる。

時期は、縄文時代の竪穴住居址と共通する覆土を持つSK02～SK12は縄文時代中期に位置づけられる。出土遺物が直接的に時期を決める遺物に欠けて詳細な時期を決定することはできないが、縄文集落が継続した間に構築されたものといえる。それぞれの役割を特定できる材料は得られなかったが、ゴミ穴・墓壙等の用途が考えられる。

SB04を切るSK01は、覆土がそれ以外の土坑と異なる上、覆土中に炭を多く含んでおり、底部には焼土が認められた。出土遺物がないために時期の決め手に欠けるが、湯川遺跡の縄文時代以外で遺物がみられる中世に位置づく可能性がある。

柱穴はほぼ全域に認められるが、SB03南東側と調査区の南東部に集中する。掘立柱建物址としては把握はできなかったが、そうした可能性を否定することはできない。ともすれば、こうした柱穴は、集中して検出されるためにつながりを把握することが困難になってしまう。今回も例外ではなかったが、今後は注意深い調査が必要である。

時期は直接的に結びつく遺物がなく詳細な位置づけはできないが、これまでの当地方における同様遺構の調査例からみて中世に位置づく可能性を指摘しておく。

第1表 土坑一覧表

番号	検出位置	規模(長/短/深cm)	形態	覆土	断面形	重複遺構	出土遺物
1	BS49・0	60×58×11	円形	灰黒色砂質土	碗状	SB04	
2	BU2	84×65×31	楕円形	褐色土	逆台形		縄文器片6・石器片1・黒曜石片2
3	BQ・R47	64×58×21	円形	褐色土	逆台形		石器剥片1
4	BQ47	50×40×20	不整長方形	褐色土	逆台形		縄文土器片5・打製石錘1
5	BP・Q49	106×86×22	不整長方形	褐色土	皿状		縄文土器片20・石器剥片1・黒曜石片1
6	BP・Q49・50	84×68×27	不整長方形	褐色土	逆台形	穴	縄文土器片1・粗製石匙1
7	BR1・2	72×64×25	不整長方形	褐色土	逆台形		打製石斧1・横刃型石器1
8	BR2	68×66×38	円形	褐色土	袋状		
9	BR45	65×40×10	楕円形	褐色土	皿状	穴	
10	BR41・42	80×67×15	不定形	暗褐色土	不定形		
11	BO41	—×73×16	—	暗褐色土	不定形		
12	BH41・42	—×73×16	—	暗褐色土	皿状		

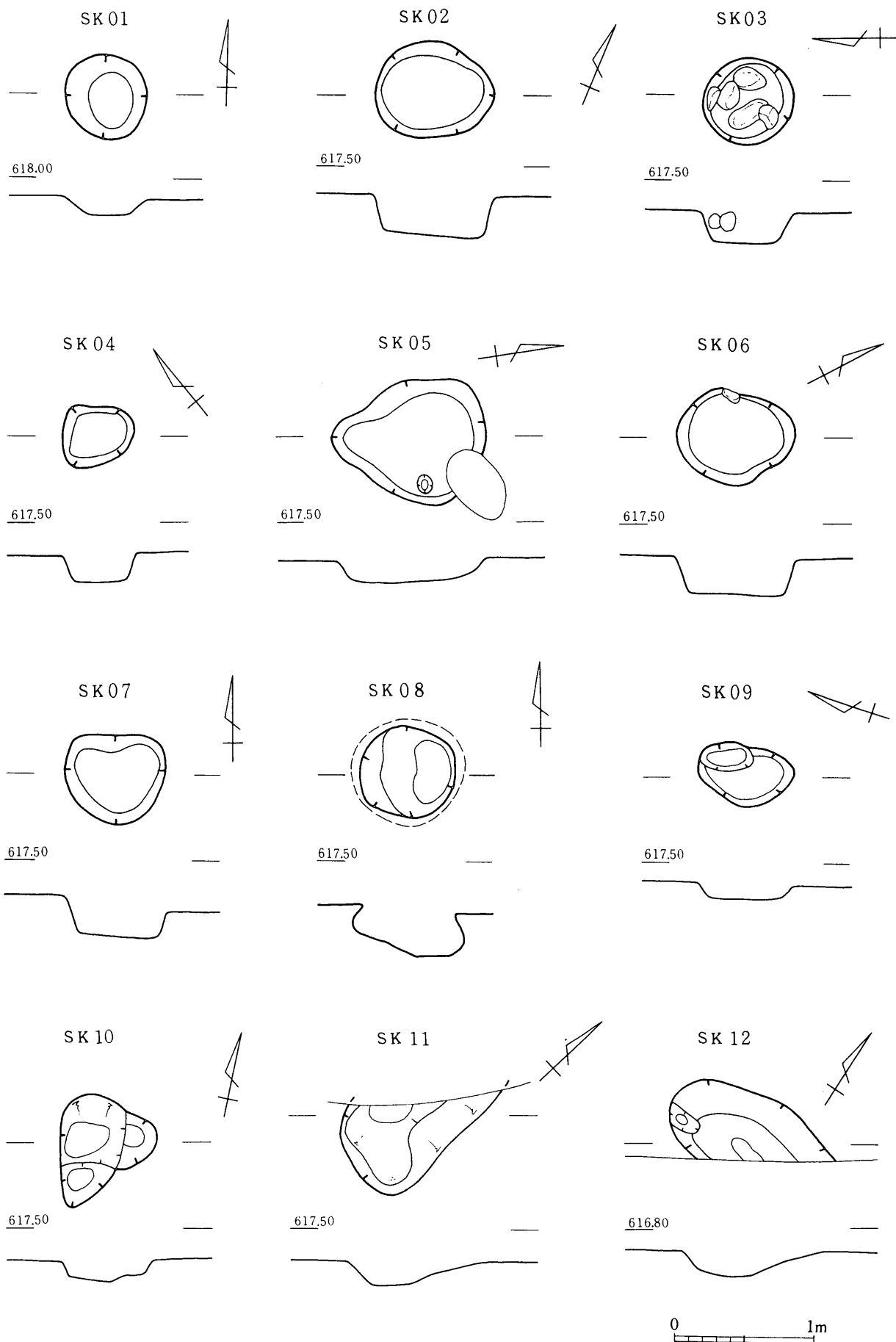


插图12 SK1~12

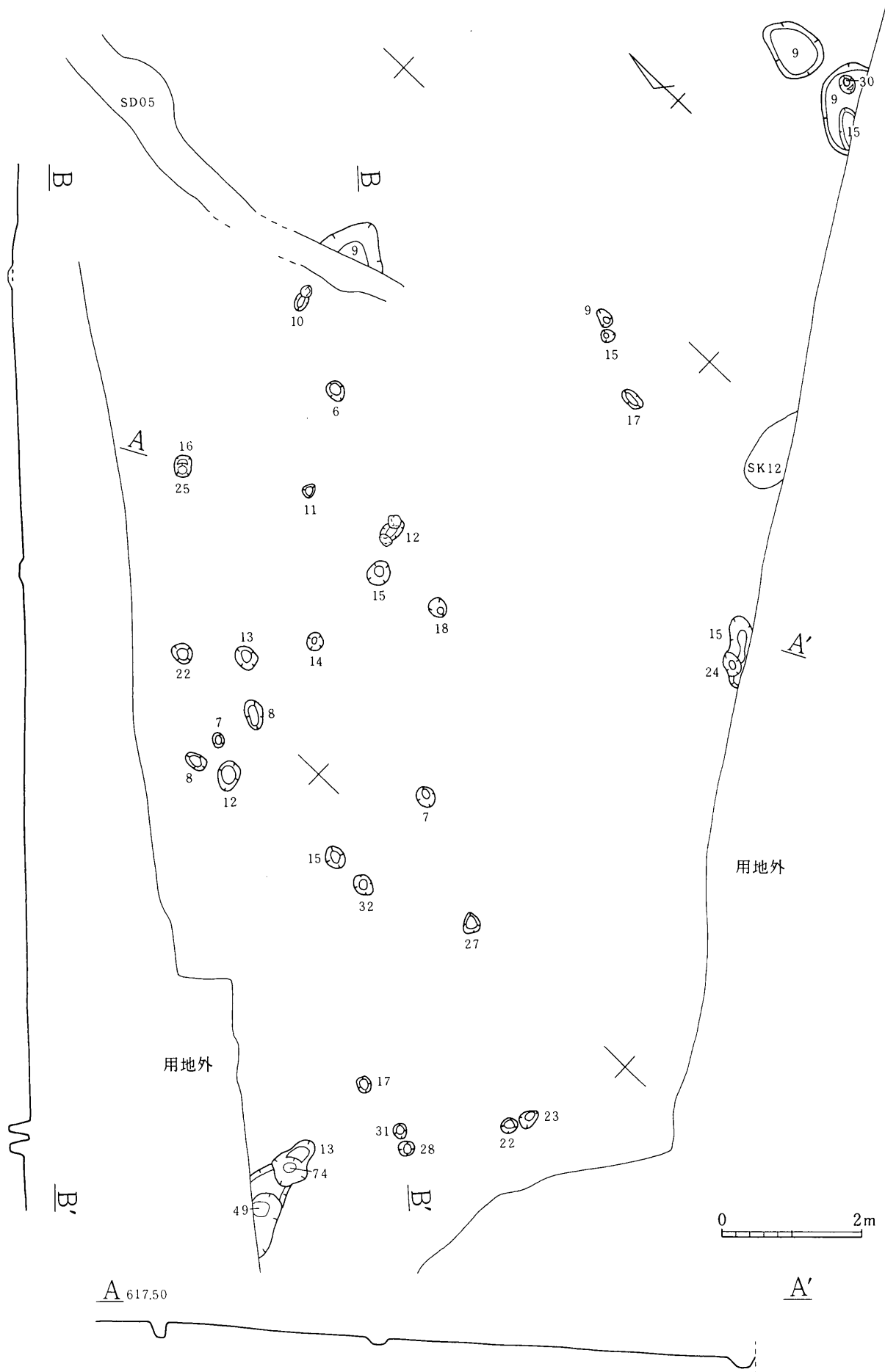


插图 13 柱穴·穴 (1)



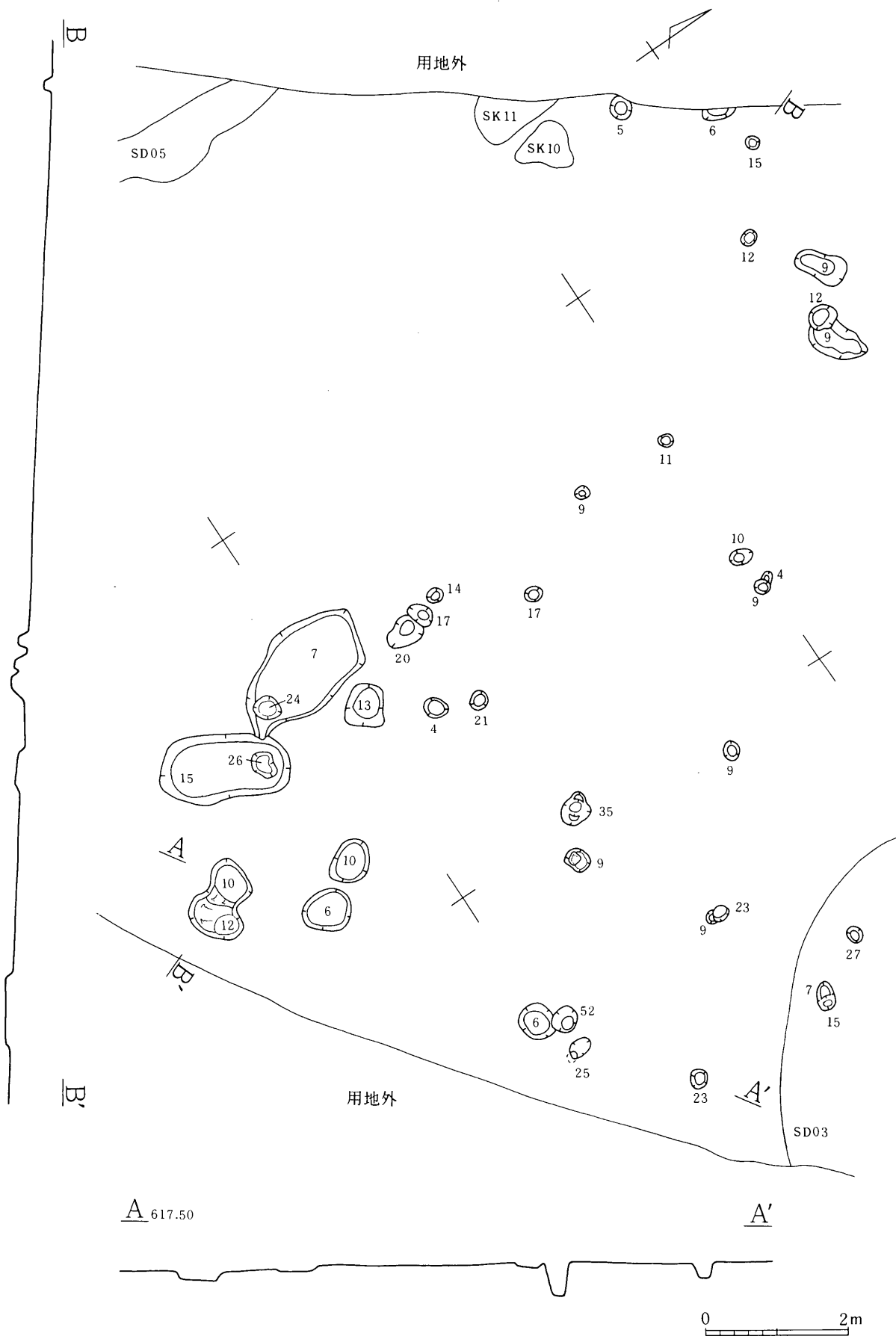


插图 14 柱穴·穴 (2)

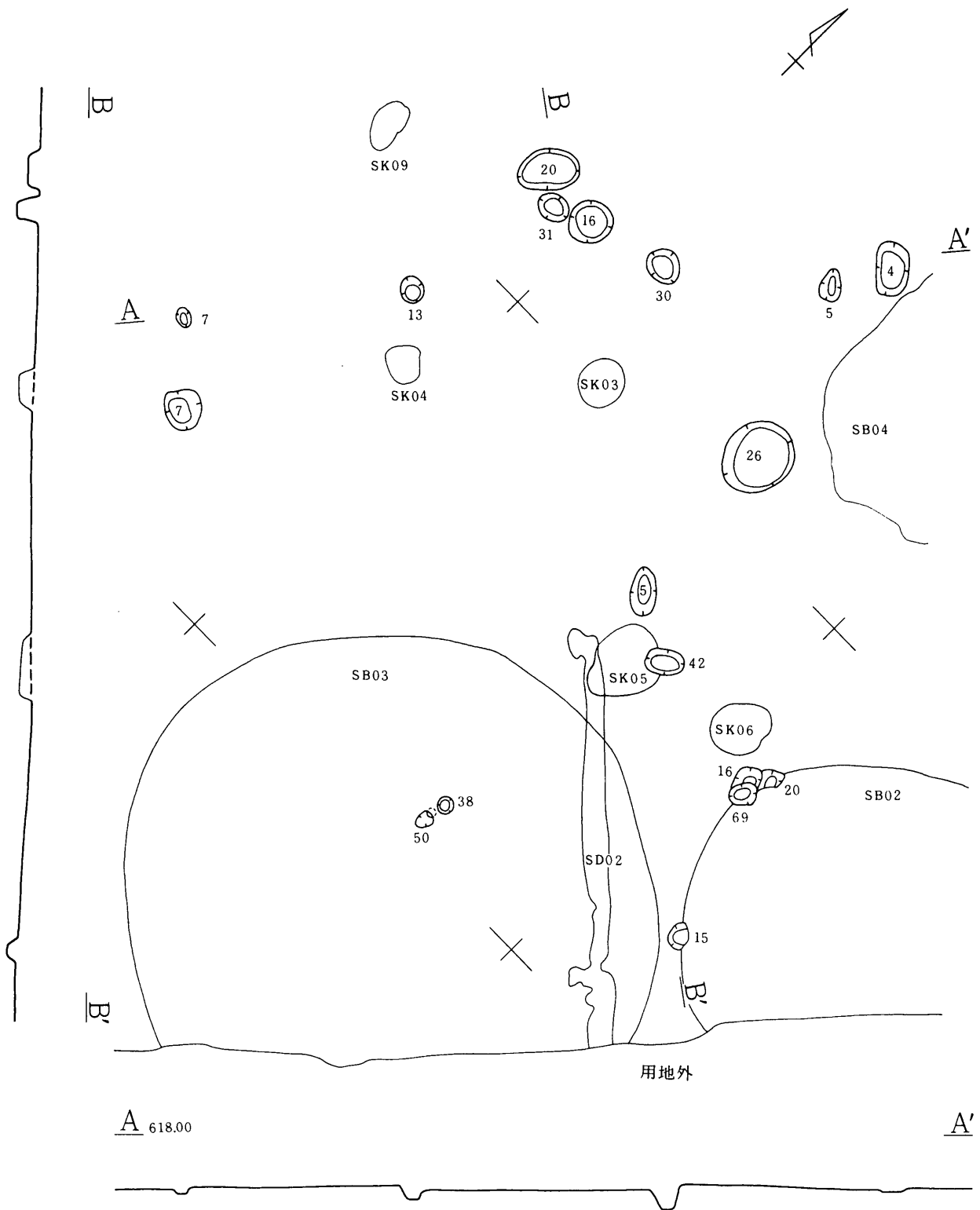
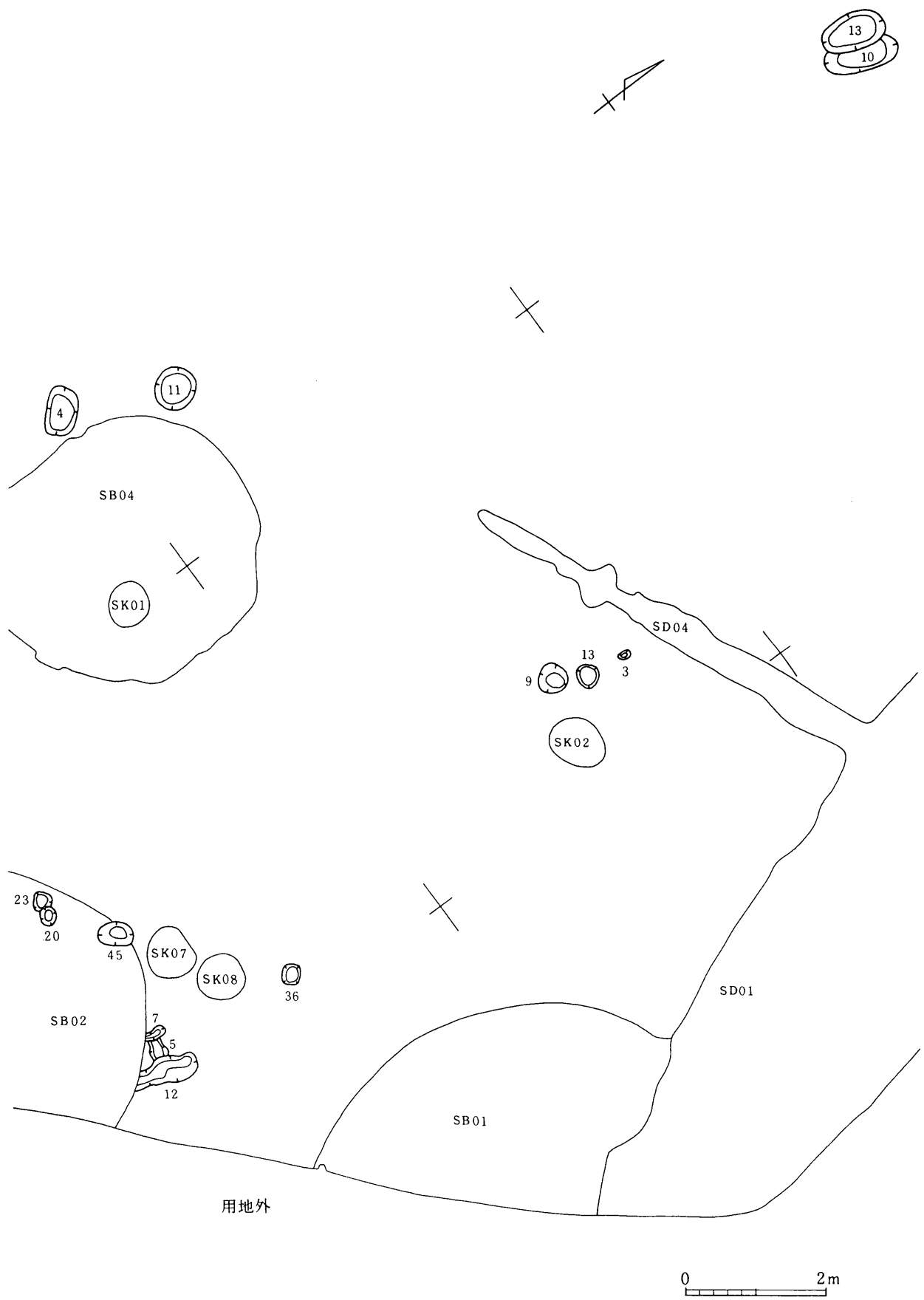


插图15 柱穴·穴(3)



挿図16 柱穴・穴(4)



## Ⅳ まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べてきたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を指摘してまとめとしたい。

調査範囲が路線幅に限られうえに、水田造成で地形改変を受けていたため遺構の遺存状態が悪いものであった。そうした限定はあるものの、一定の成果をあげることができた。主体となる時期ごとに考えてみる。

縄文時代は竪穴住居址と土坑から構成される湯川に面する台地上に立地する集落の一部を調査した。調査した竪穴住居址は4軒のみであるが、湯川に面する台地北端部今次調査区でいえば、ほぼ北側半分に集中する。南側は竪穴住居址はいうに及ばず、土坑すら少なくなる。さらにいえば、未報告ではあるが、市道拡幅に伴って平成7年度で実施した今次調査地南側の調査では遺構・遺物は確認されず、集落範囲外であることが確かめられている。もう一つ、湯川集落を考察するうえで欠かすことができない調査に、中央道西宮線の調査地点がある。今次調査地から南東側に50m程離れており、同一集落といえる。ここでも湯川に近い地点に竪穴住居址が確認されている。そうした断片的な情報を総合してみると、湯川に近い台地北縁部に集落が展開するといえる。現在の湯川は浸食作用によって段差15m程の崖となっているが、縄文時代にはそれほど比高差はなかったと考えられる。というのは、SB01の想定される範囲が崖の肩まで達していおり、縄文時代以降の浸食によって削られたと考えられるからである。生活に欠かすことのできない水を湯川に依拠した集落といえる。その南東側・北西側の範囲を知ることにはできないが、地形的にみても極めて広い範囲に及んでいないことが想定される。

竪穴住居址出土土器の詳細な検討はできていないが、おおよその見通しをつけることができる。最も古いSB03からSB01→SB02という変遷が考えられる。土器の出土が極めて少ないSB04の位置づけは困難であるが、SB01と同時存在ということも考えられる。中央道西宮線調査地点の2軒の竪穴住居址もほぼ同時期中期後葉に位置づけられる。いずれにせよ、縄文時代中期後葉に最低3時期以上変遷したことが考えられる。その始まりと終末はこれだけの資料では不明といわざるを得ないが、限られた情報から想像すれば、中期中葉の資料はほとんどないため、後葉の最初の段階ぐらいから継続した集落と考えられる。飯田・下伊那ではこの時期の集落は極めて多く、数々の資料が得られている。今次調査でさらに資料を追加することができた。こうした集落を総合的に考察すれば、湯川遺跡の位置づけもより鮮明になるといえる。

出土した土器はすべてが破片であり、完形に復元できるものすらなかった。石器も全組成を示すものではない。資料的には極めて限定されたものであることを指摘しておく、

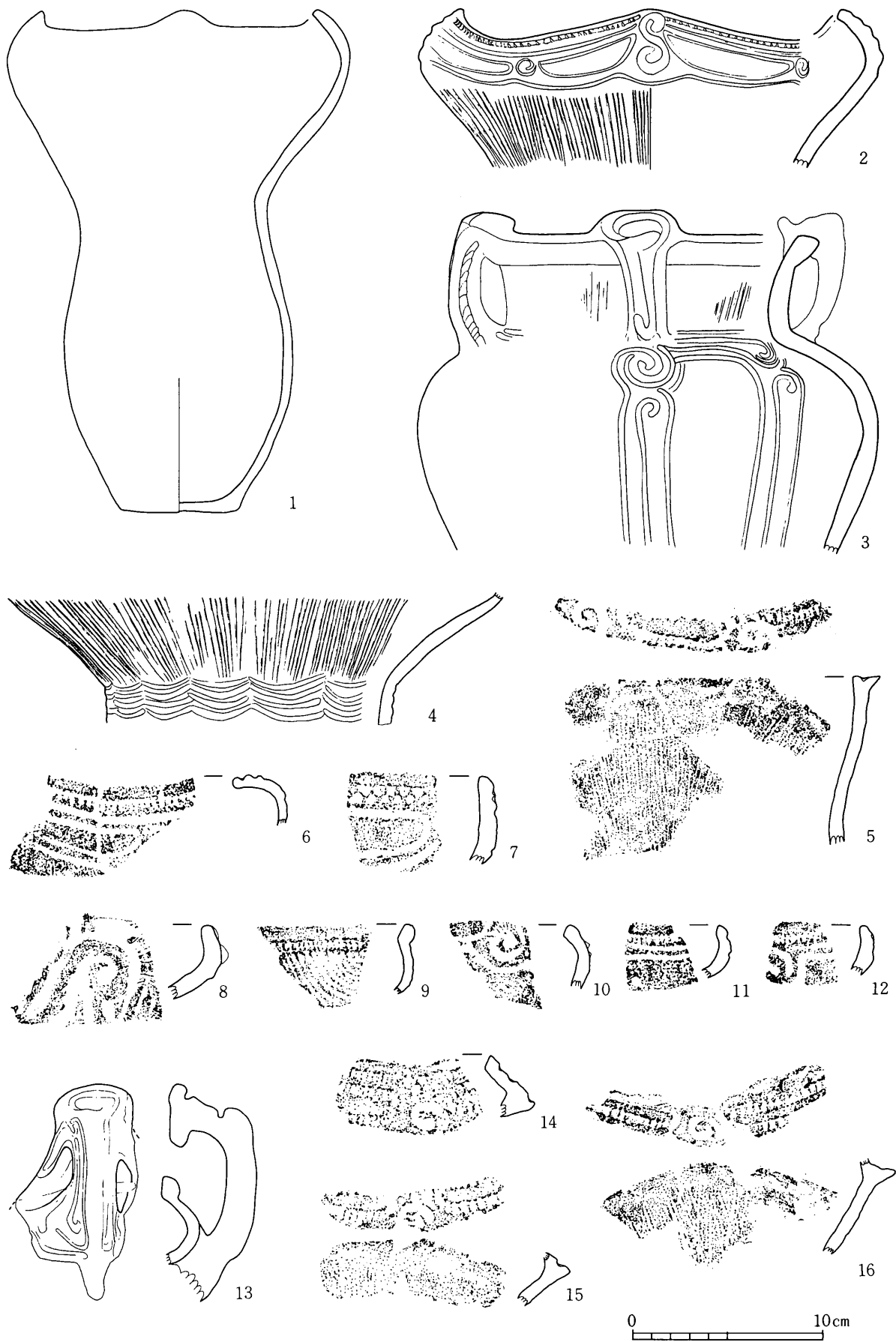
中世は用水路と考えられる溝址を調査した。中央道西宮線調査地点でも溝址を調査し、用水路と考えられている。間に未調査部が存在するが、遺構の状況や時期的な面からしても同一遺構である可能性が高い。湯川の水を利用した新田開発用のものかもしれない。その詳細な時期を示すことは、遺物の出土が極めて少ないために不可能である。

柱穴は遺構の項で中世に位置づく可能性を指摘しておいたが、遺物が出土して確定できたわけではない。これまでの当地方の類似遺構の調査例を参考にした類推の結果である。さらに、柱穴をより積極的に遺構に結びつくような調査が必要といえる。

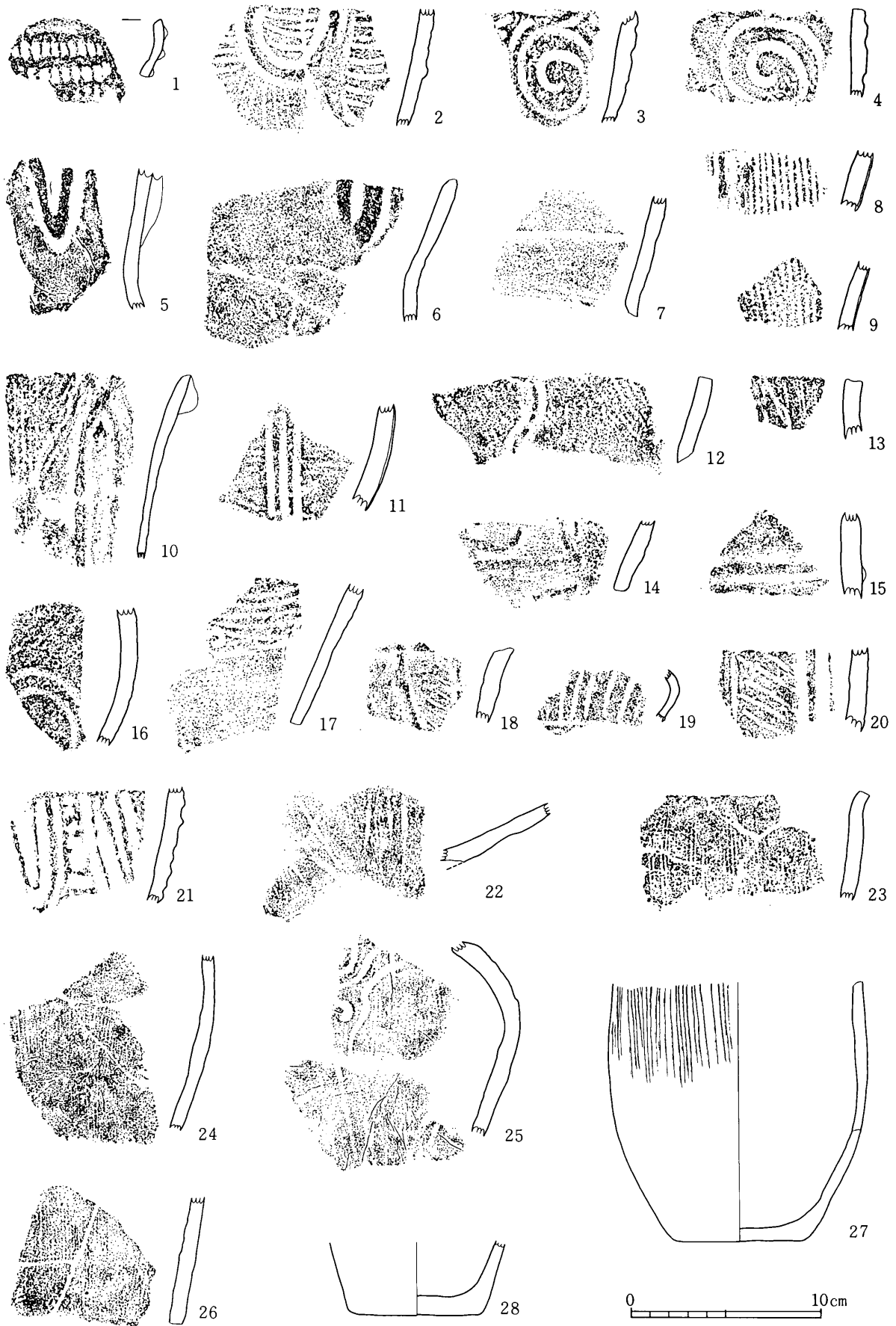
今次調査で得られた問題点・課題について記してきたが、十分に整理できたものでなく、思いつくままに述べたにすぎない。今次調査地は限定された範囲ではあったが、過去に調査された周辺地域の情報を加味することによって、その位置づけをより明確にすることができた。調査面積の大小に関わらず資料蓄積を続けることの大切さを明記して、今次調査のまとめとする。

#### 引用・参考文献

- |          |       |                       |            |
|----------|-------|-----------------------|------------|
| 飯田市教育委員会 | 1981  | 『白山遺跡』                |            |
| 飯田市教育委員会 | 1989  | 『高野遺跡』                |            |
| 上郷町教育委員会 | 1989  | 『垣外遺跡』                |            |
| 下伊那郡誌編纂會 | 1991  | 『下伊那史』第一卷             |            |
| 下伊那考古学会  | 1966  | 『箱川原遺跡』               |            |
| 長野県教育委員会 | 1973A | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 | －飯田地区その2－』 |
| 長野県教育委員会 | 1973B | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 | －飯田地区その3－』 |



第1图 SB01出土土器(1)

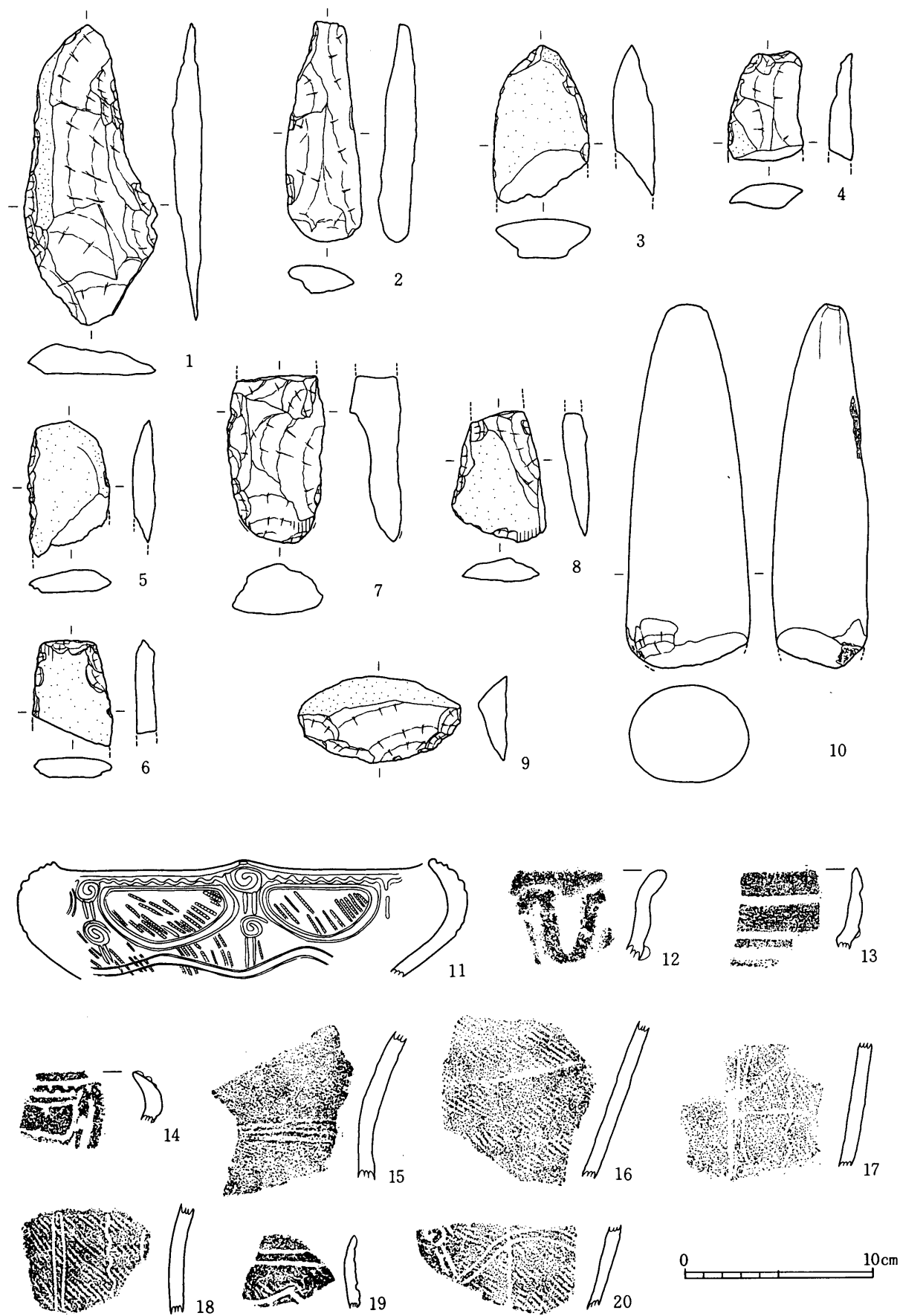


第2図 SB01出土土器(2)

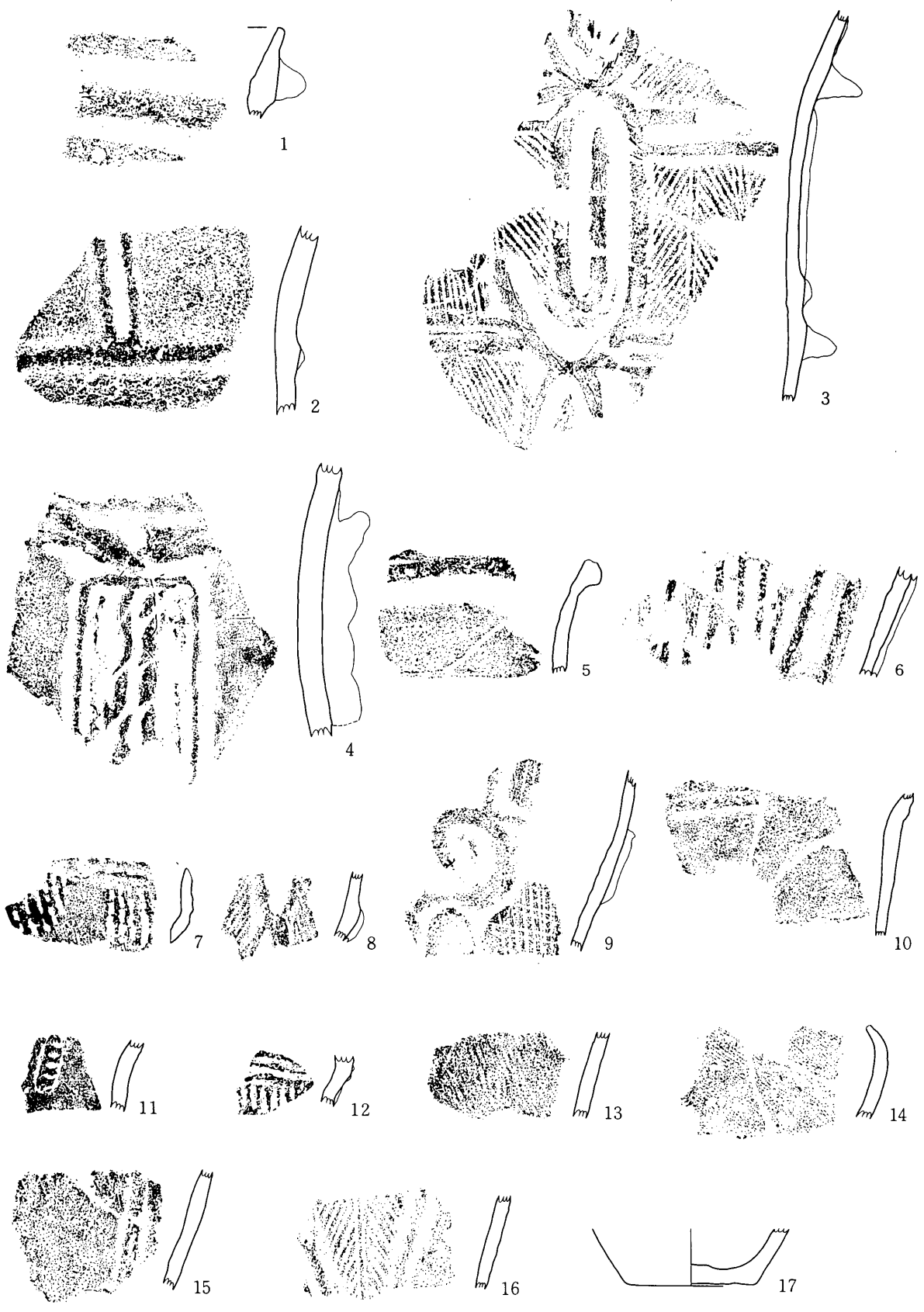




第3圖 SB01出土石器(1~3)、SB02出土土器(4~29)

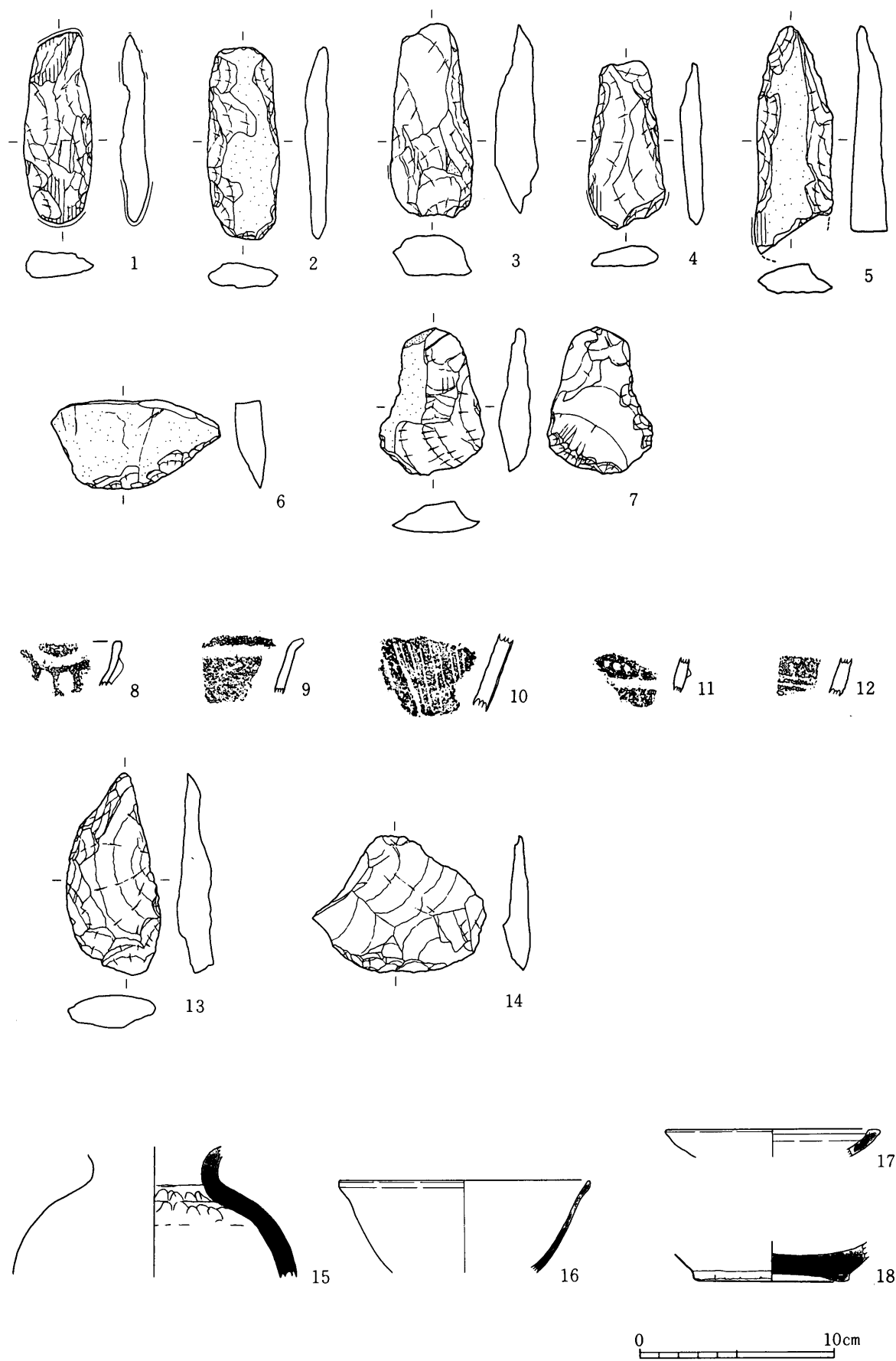


第4图 SB02出土石器(1~10)、SB03出土土器(11~20)

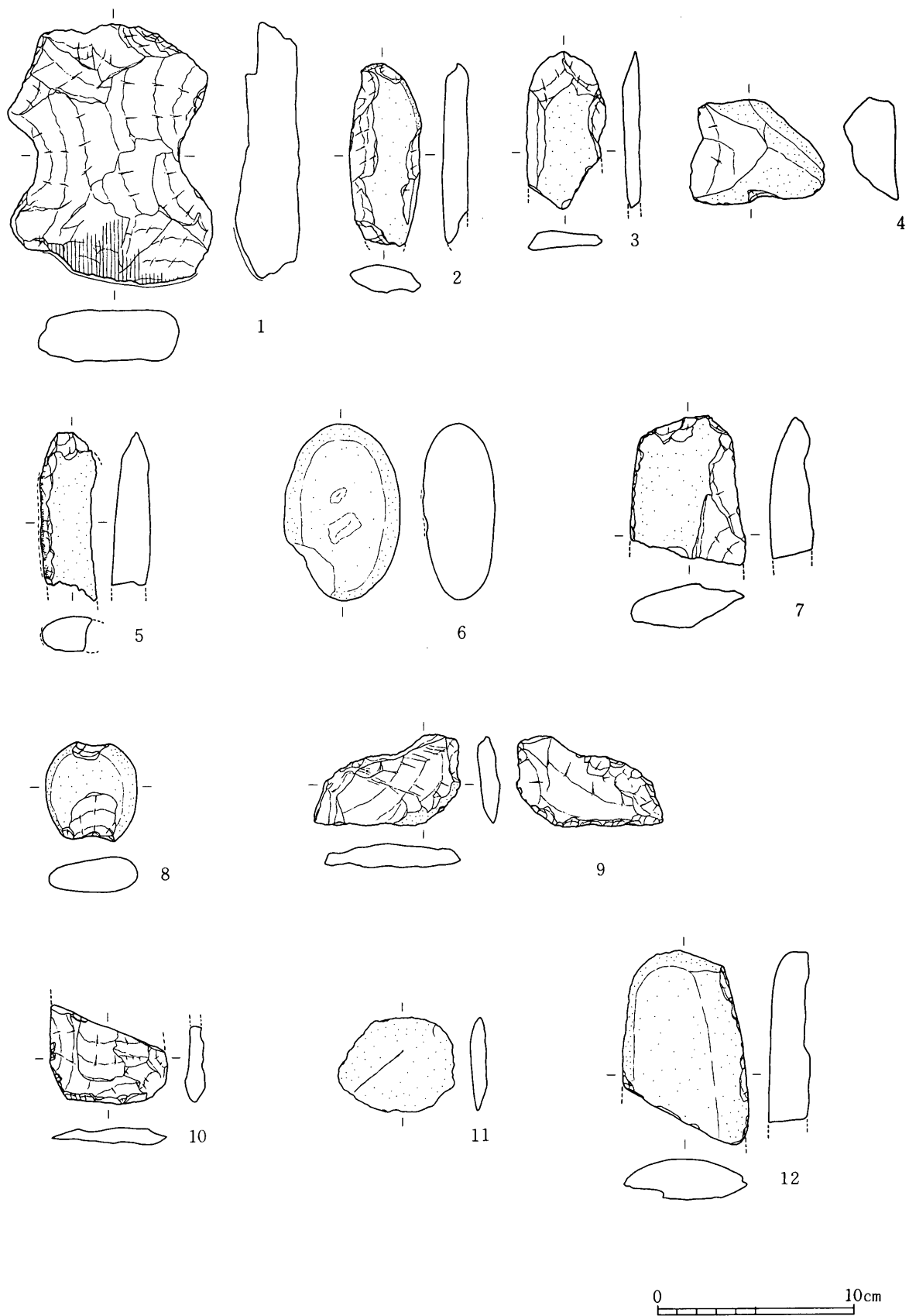


0 10cm

第5图 SB03出土土器

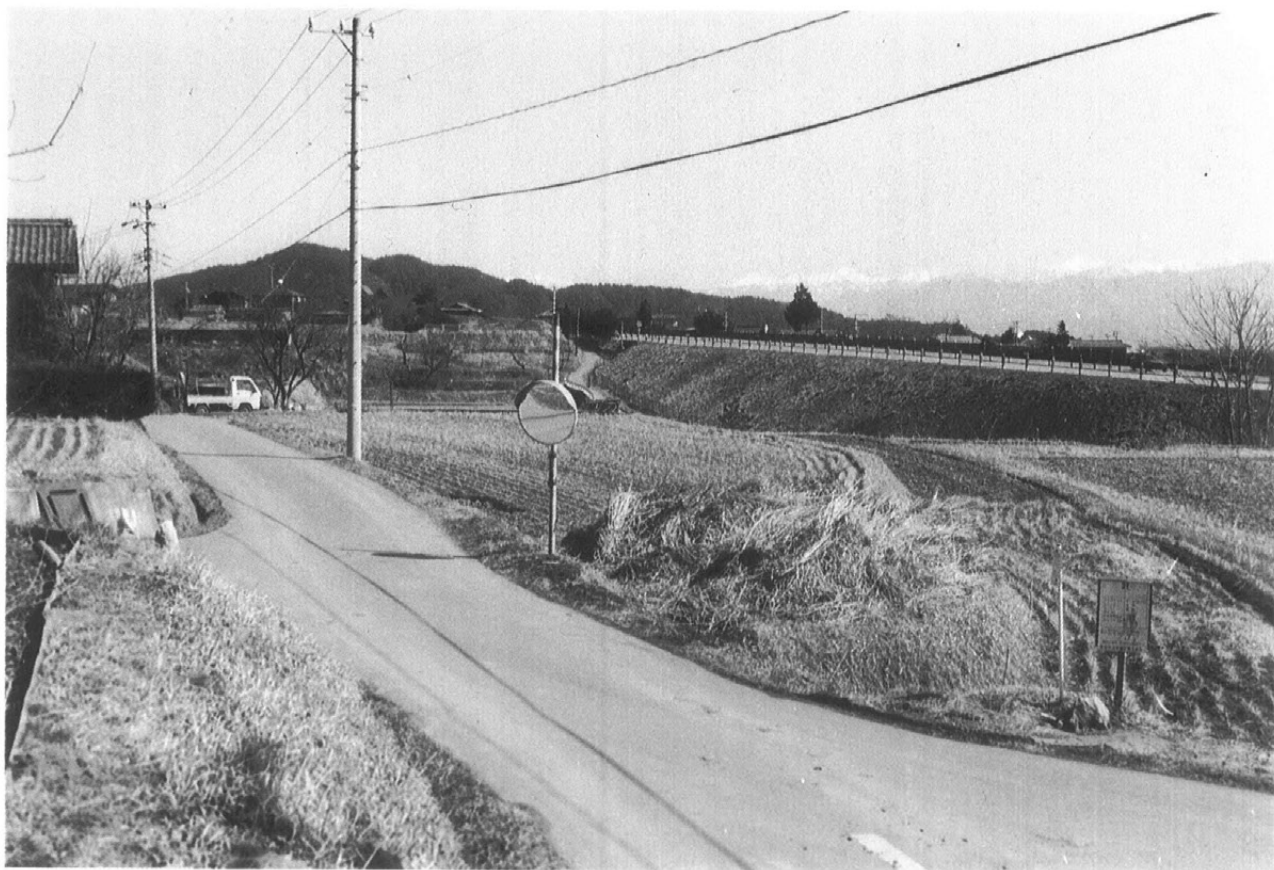


第6図 SB03出土石器(1~7)、SB04出土遺物(8~14)、SD01出土土器(15~18)

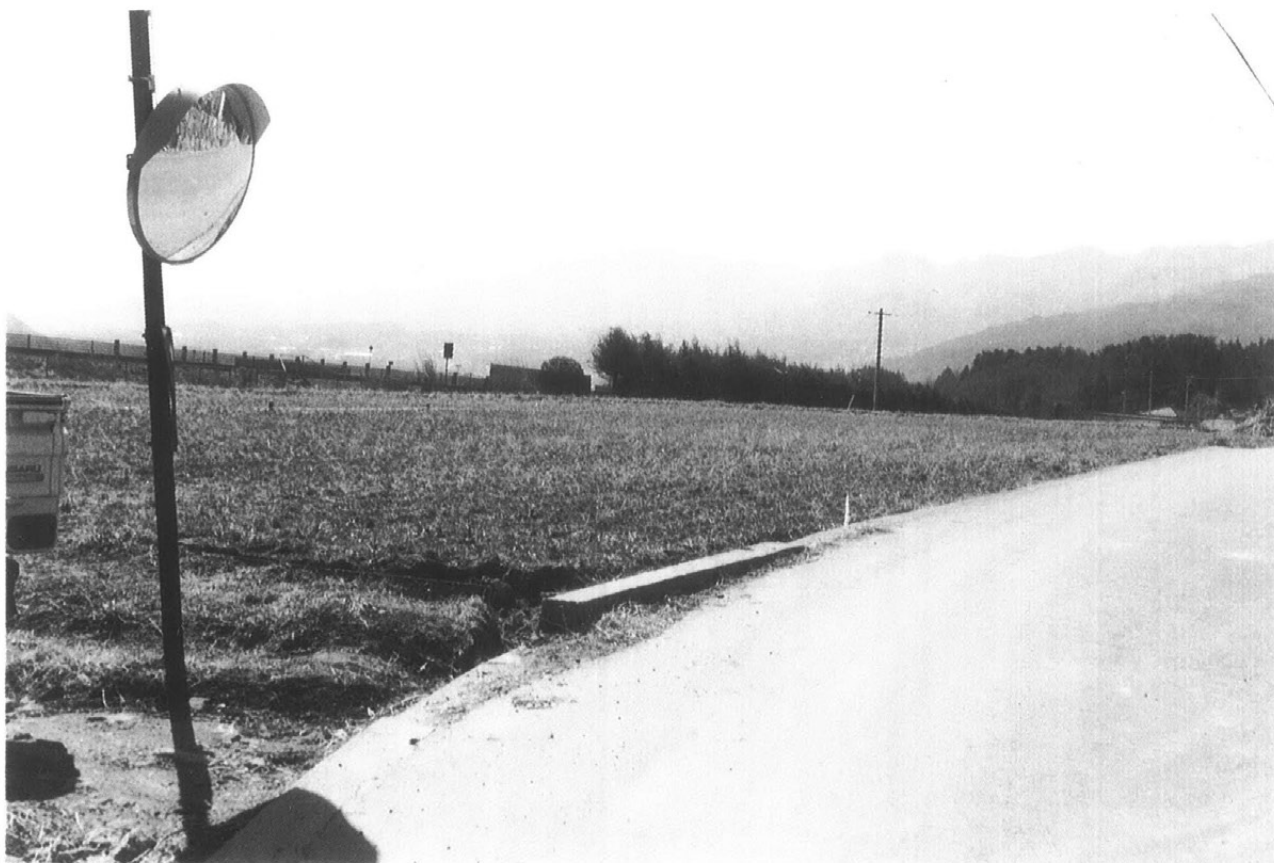


第7图 SD01 (1~4) · SD02 (5) · SD03 (6) · SD04 (7) ·  
SK04 (8) · SK06 (9) · SK07 (10·11) · BK44P1 (12) 出土石器

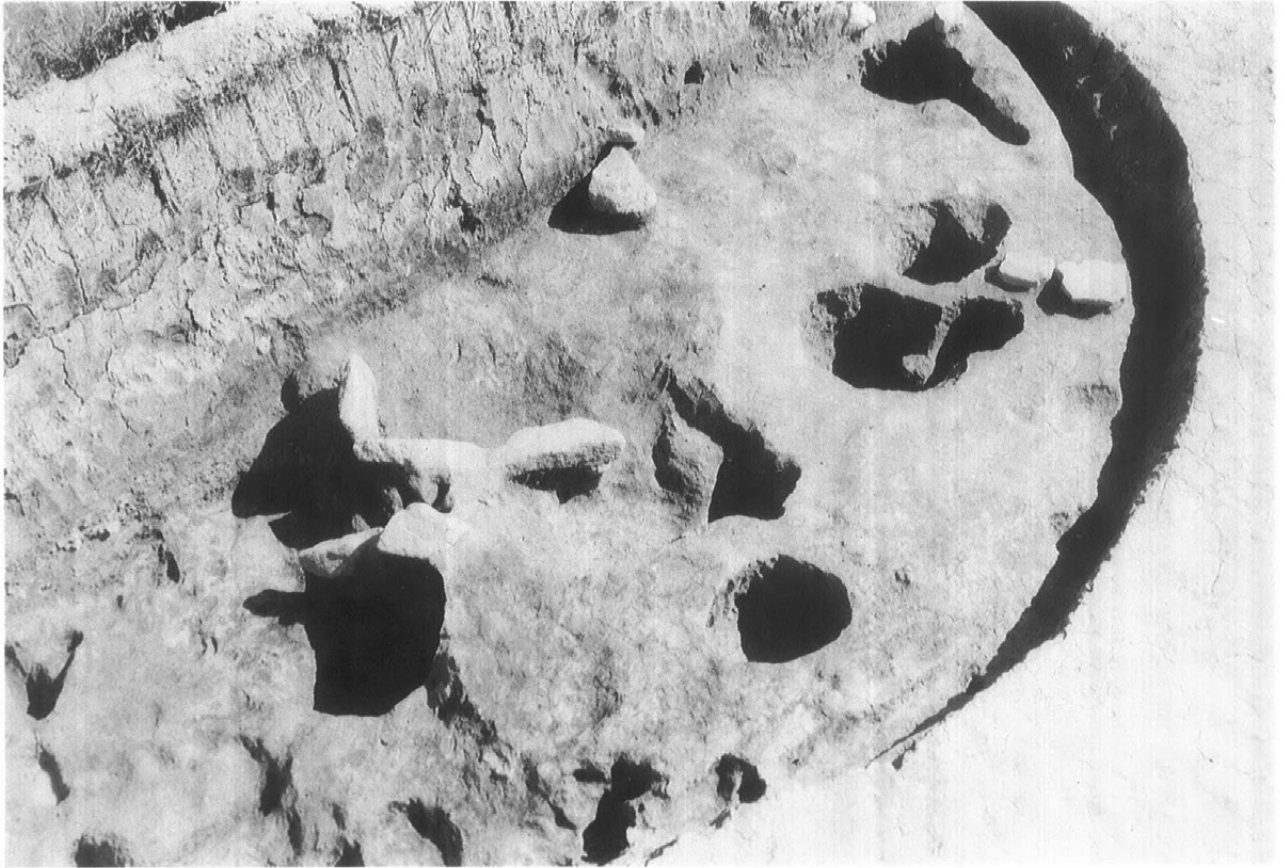
# 写真図版



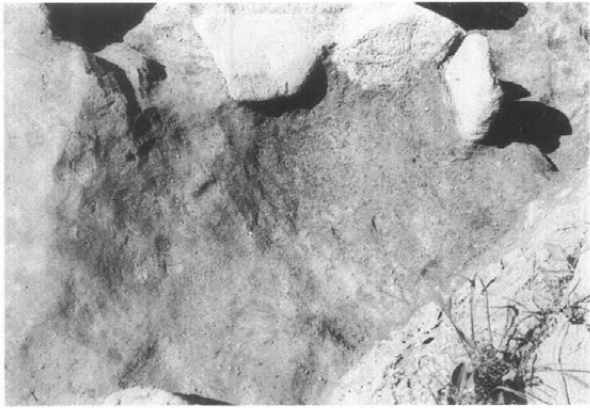
湯川遺跡調査前（南西から）



湯川遺跡調査前（北から）



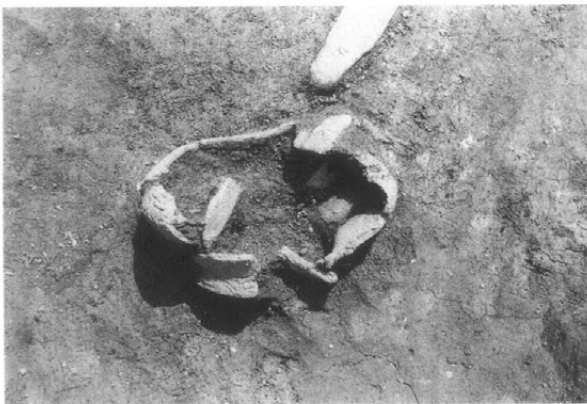
SB 01



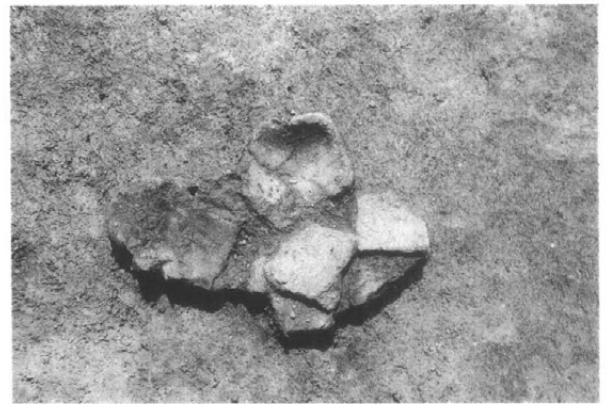
SB 01 炉址



SB 01 土器出土状态

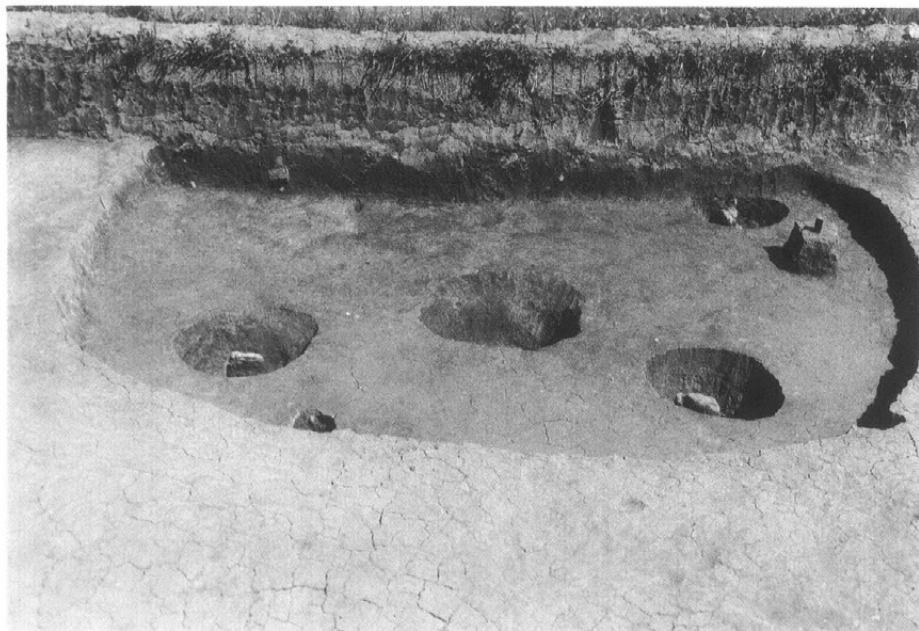


SB 01 土器出土状态



SB 01 土器出土状态





S B 0 2



S B 0 2 炉址



S B 0 2 炉址断ち割り



S B 0 3



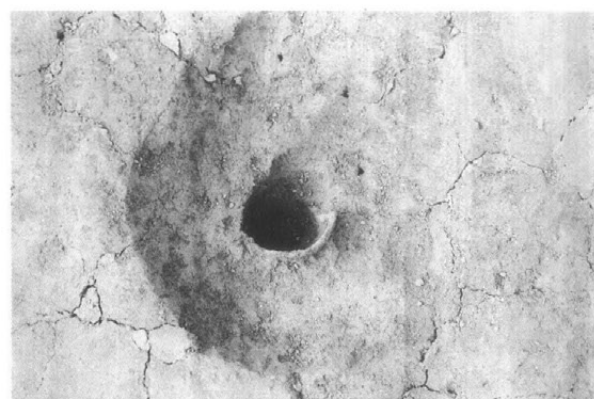
S B 0 3 炉址



S B 0 3 炉址断ち割り



S B 0 3 埋設土器



S B 0 3 埋設土器



SB04

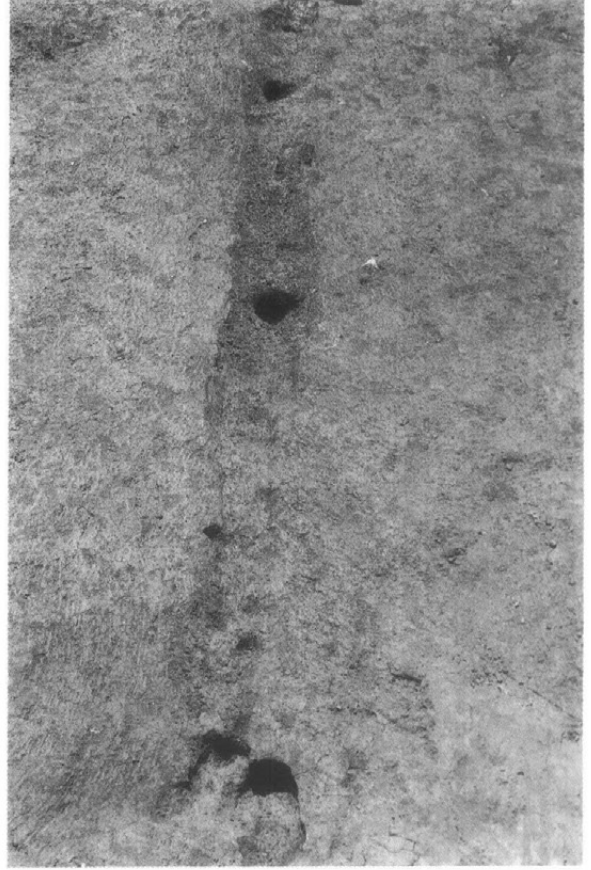


SB04 炉址

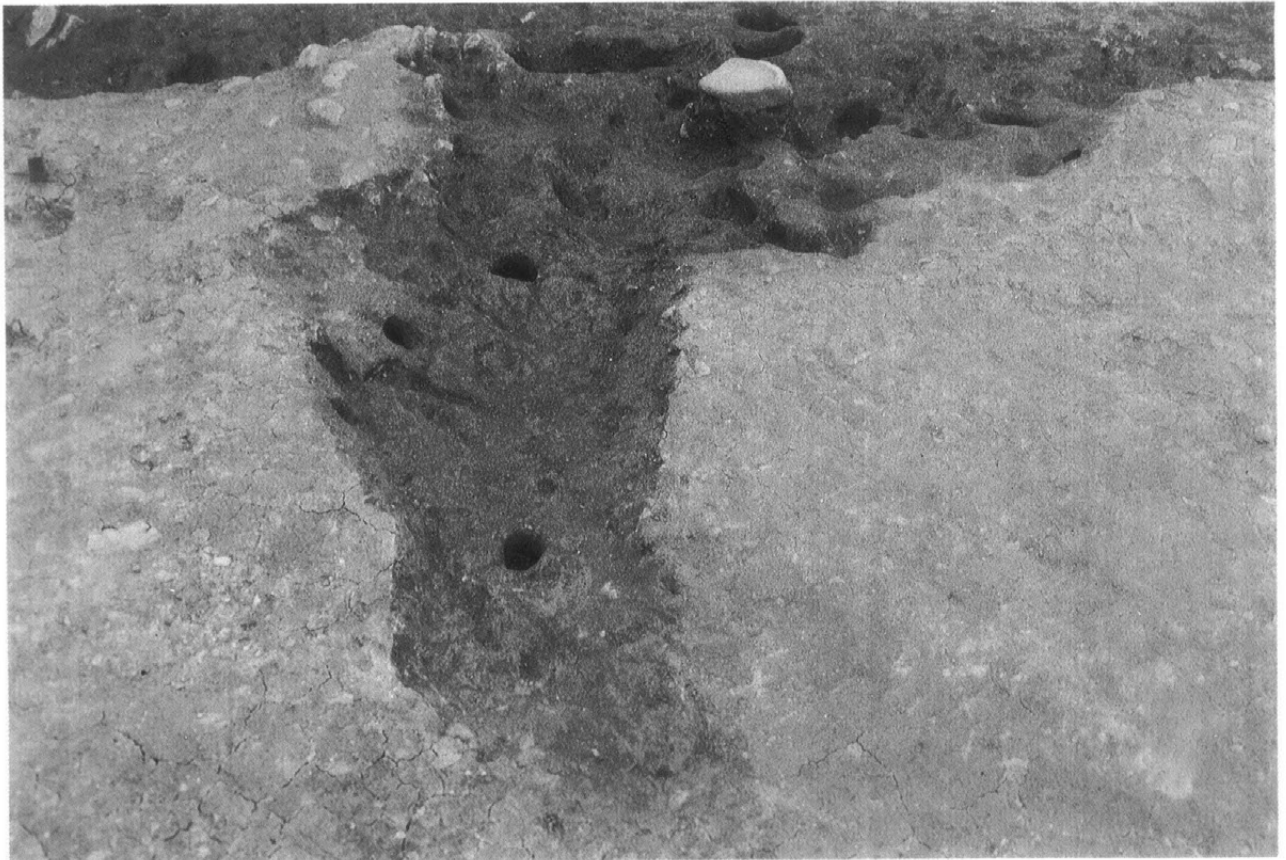




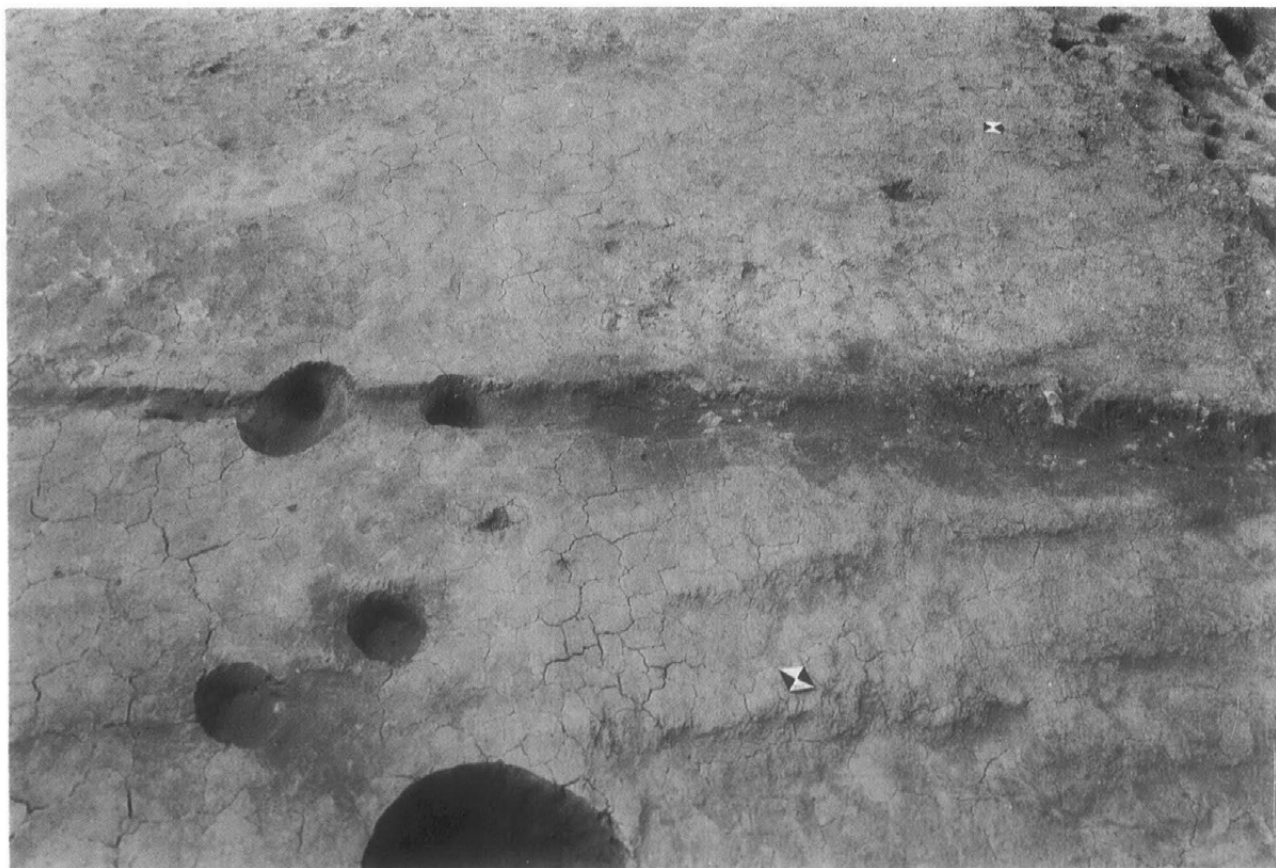
SD01



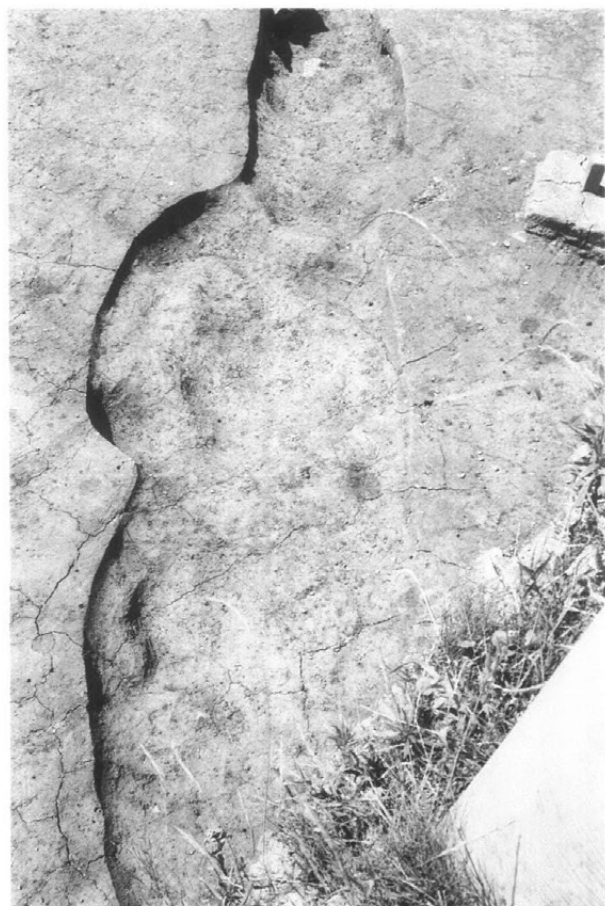
SD02



SD03



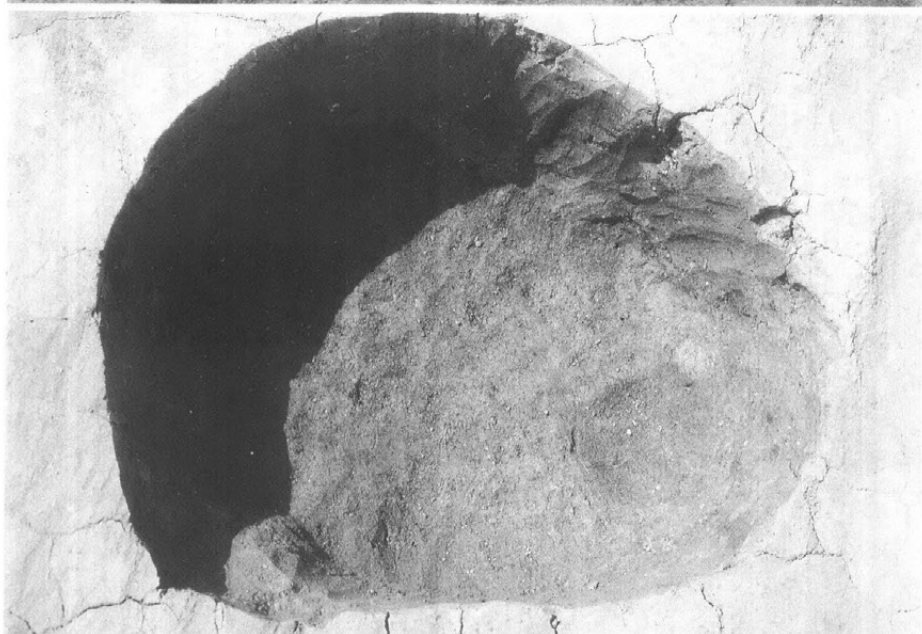
SD04



SD05



SK 01



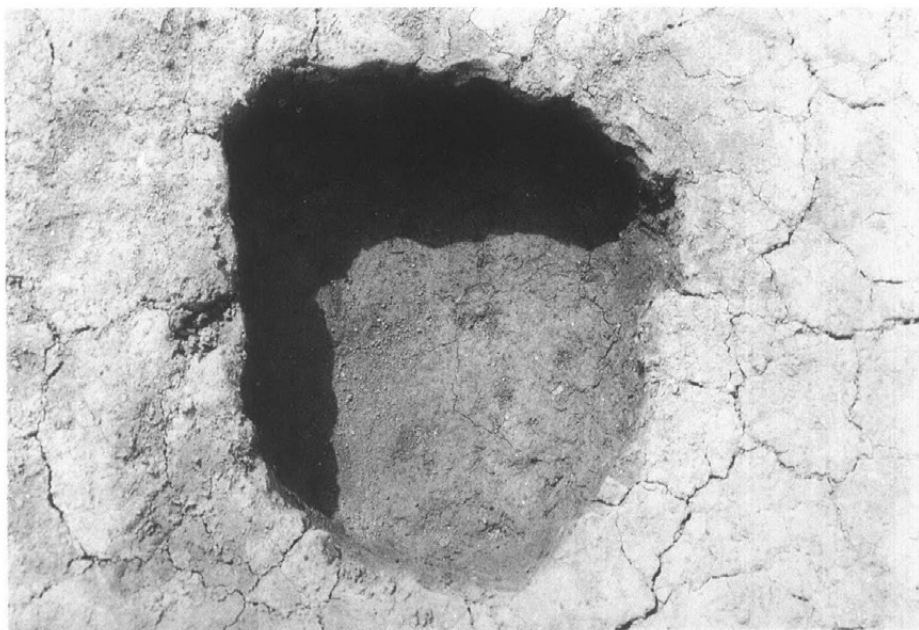
SK 02



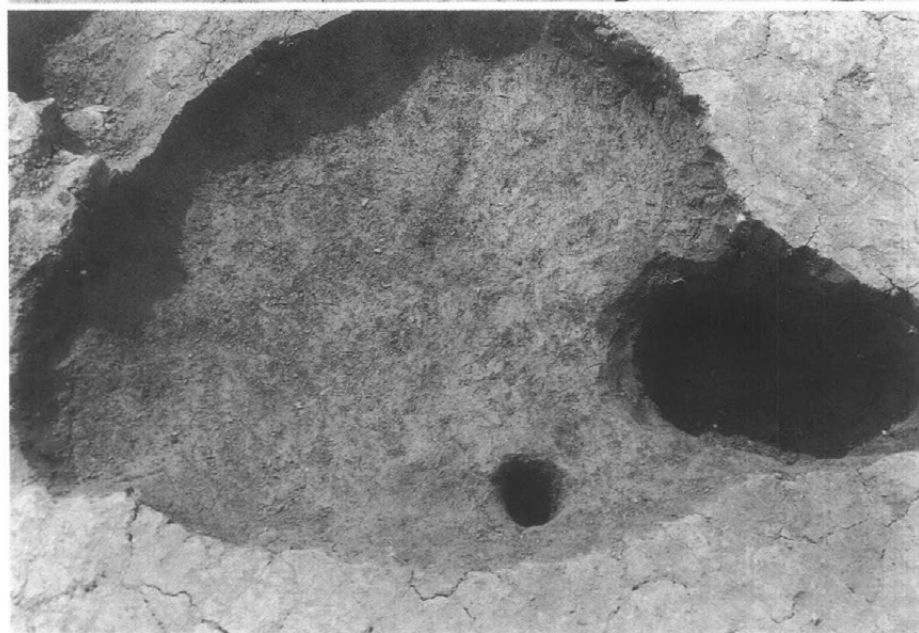
SK 03



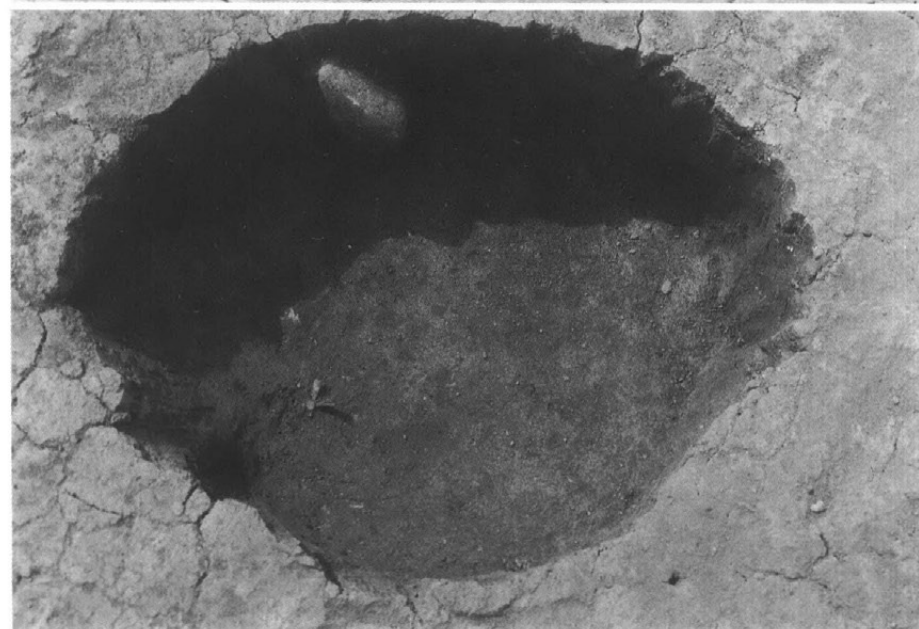
SK 04



SK 05



SK 06

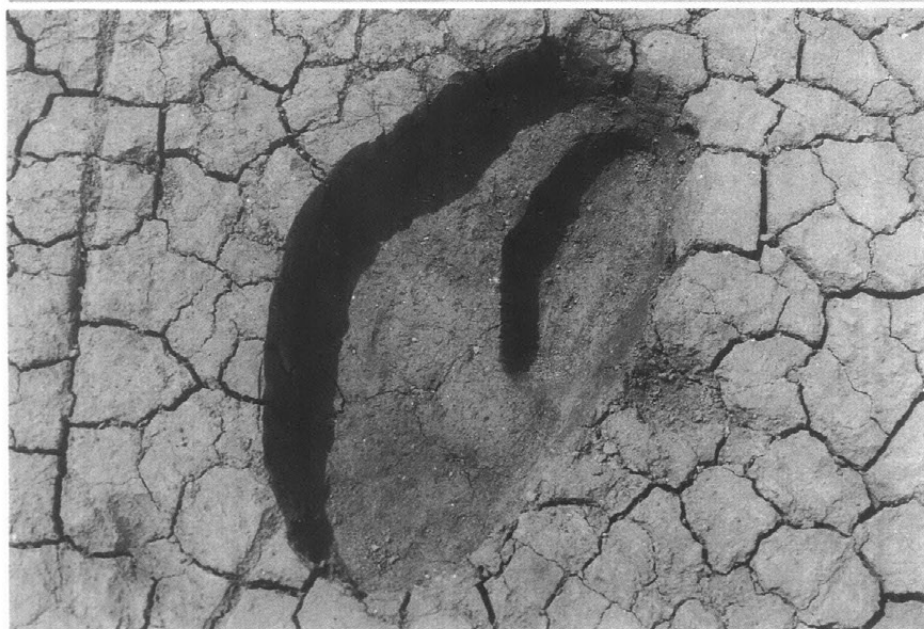




SK07



SK08



SK09



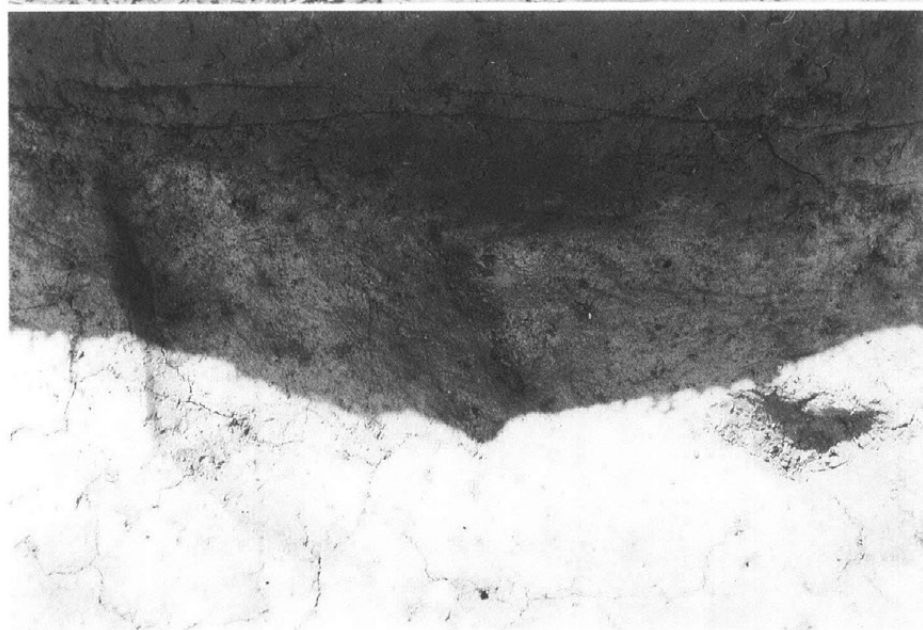
SK 10



SK 11



SK 12

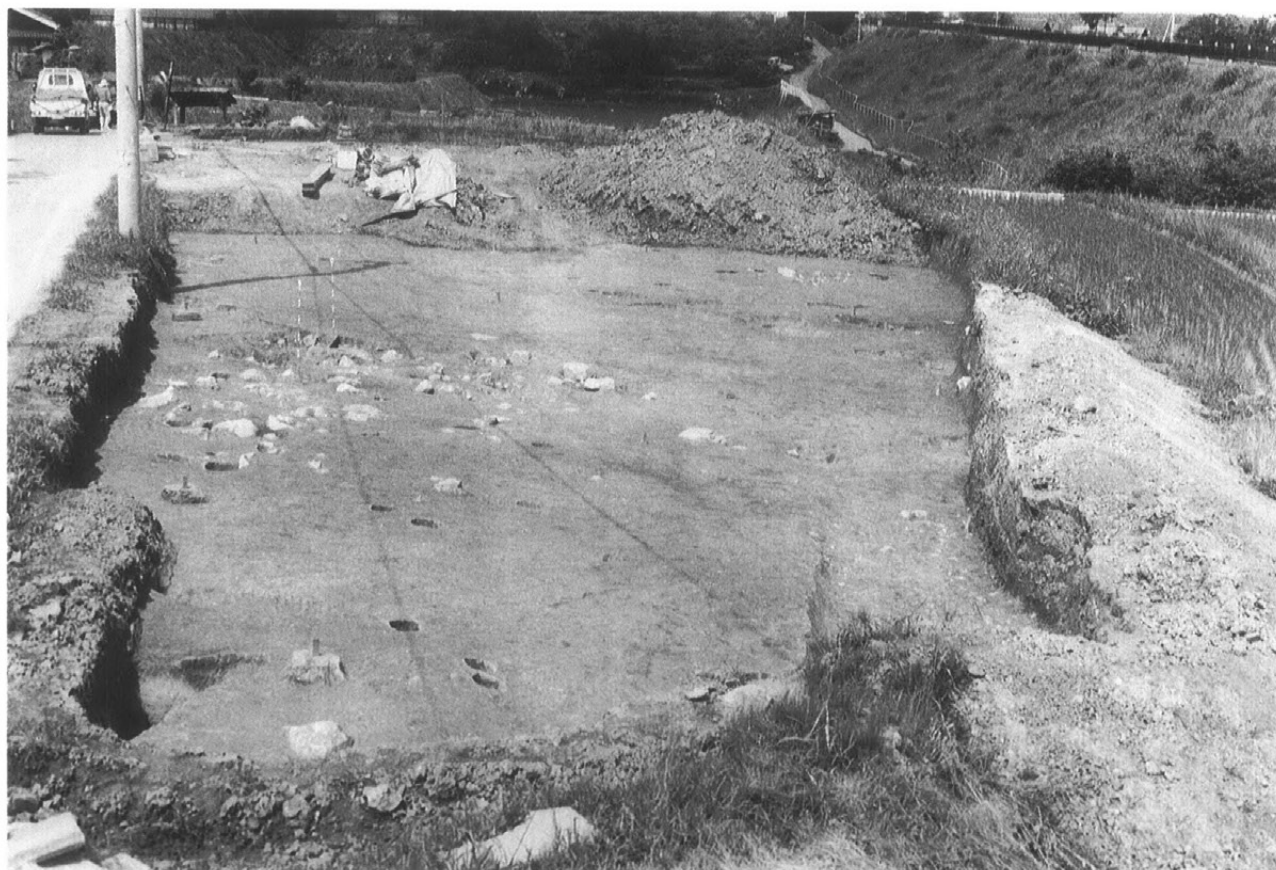




北側調査区全景（南西から）



北側調査区全景（北から）

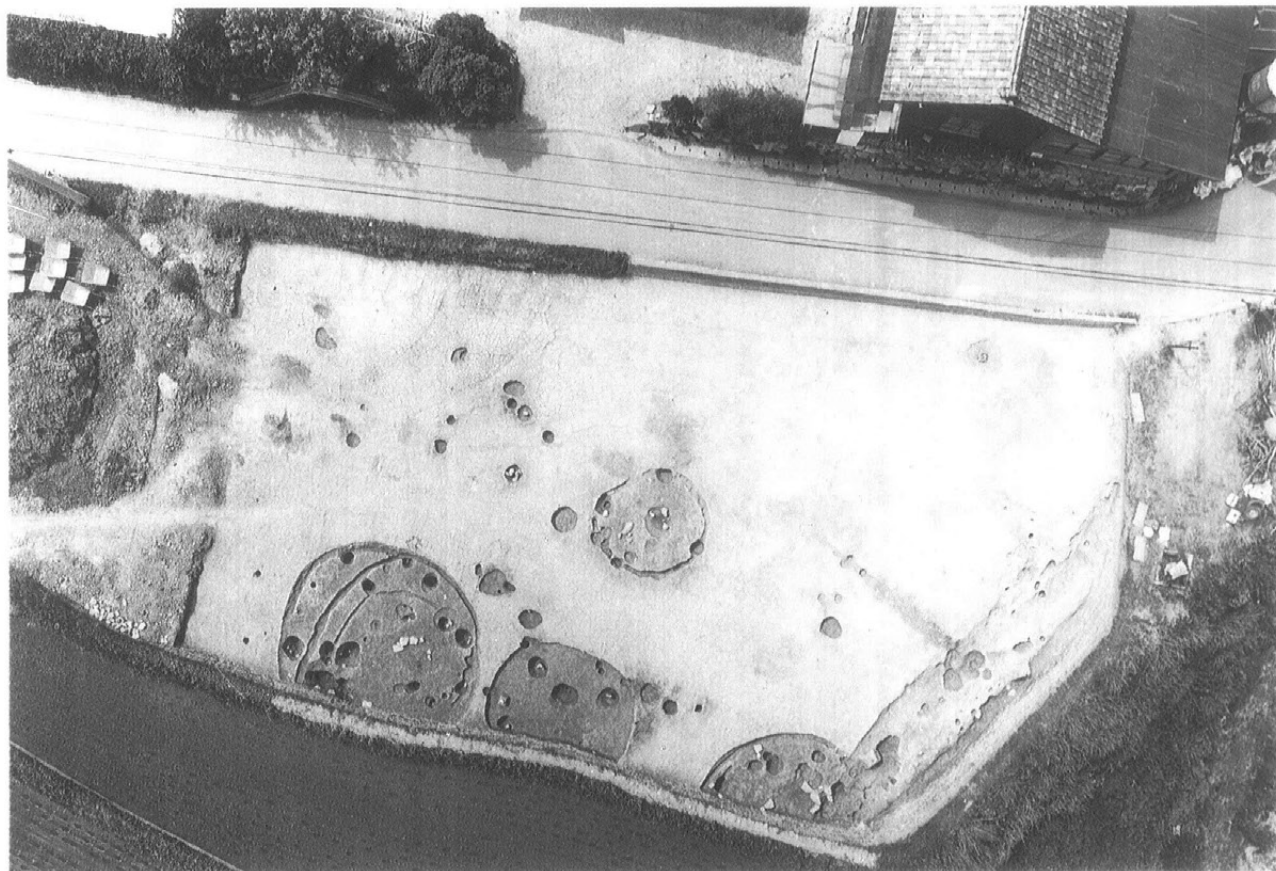


南側調査区全景（南西から）

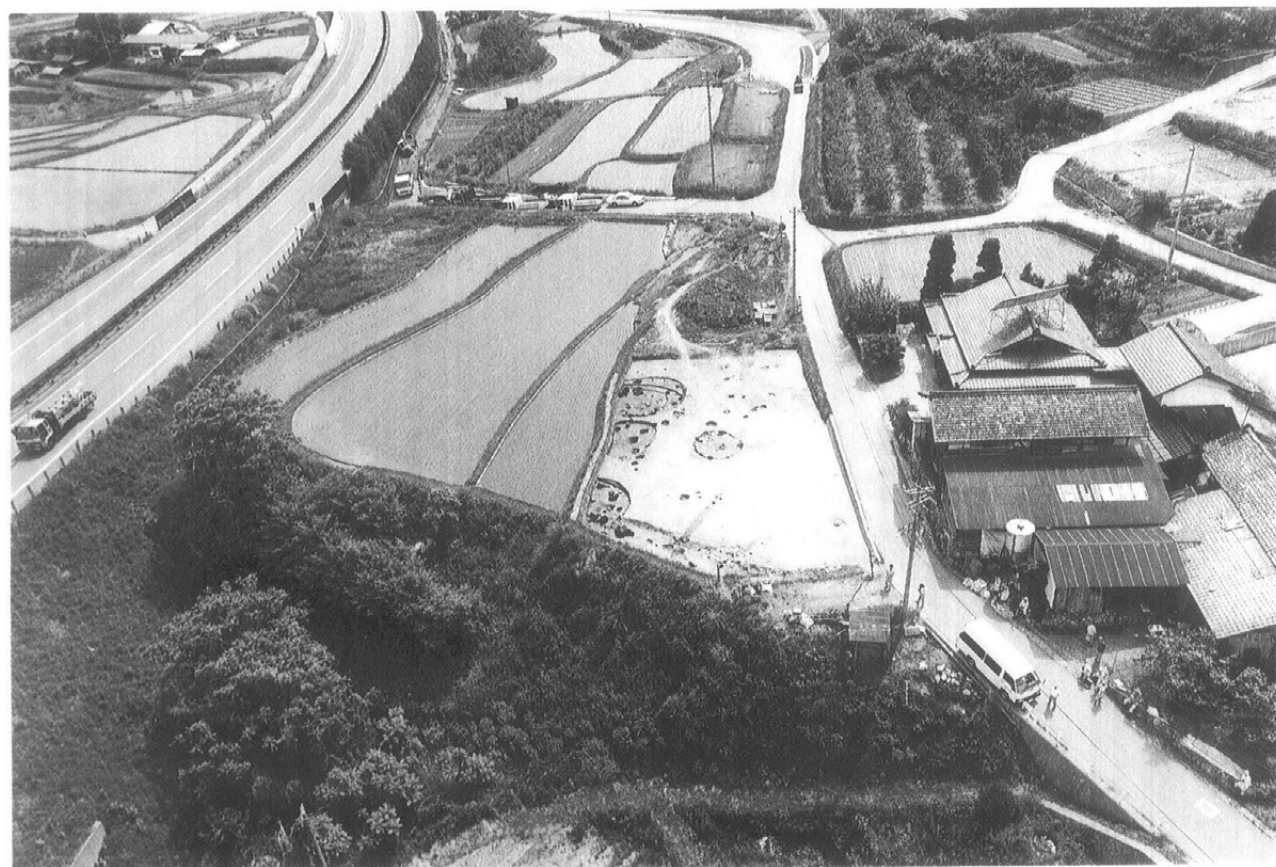


南側調査区全景（北東から）





北側調査区全景（上空から）



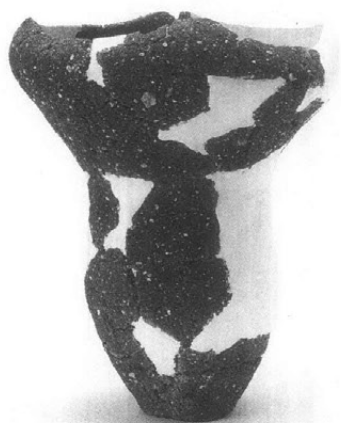
北側調査区全景（斜め上空北東から）



南側調査区全景（上空から）



南側調査区全景（斜め上空北東から）



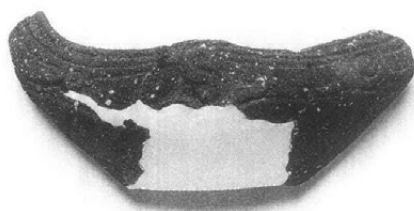
SB01 深鉢



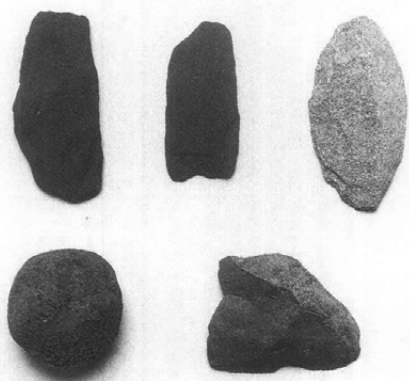
SB01 深鉢



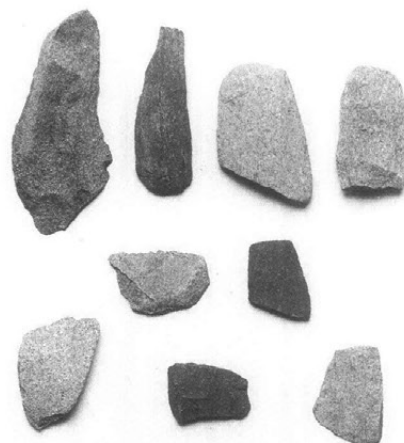
SB01 深鉢



SB01 深鉢



SB01 石器



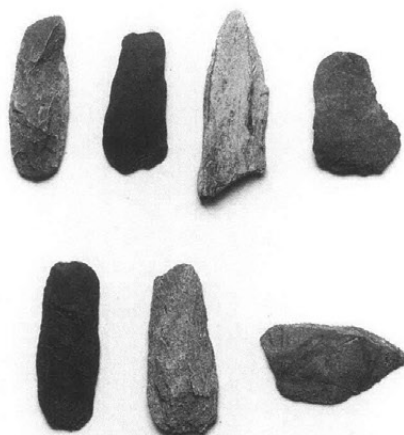
SB02 石器



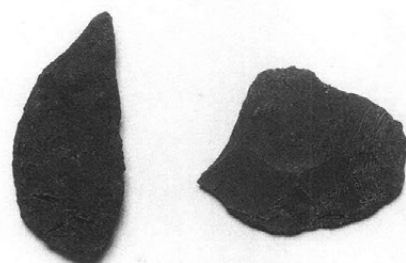
SB02 磨製石斧



SB03 深鉢



SB03 石器



SB04 石器



SK04 石錘



SB06 粗製石匙





調査スナップ



調査スナップ



## 報告書抄録

ふりがな	ゆかわ
書名	湯川遺跡
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山下誠一
編集機構	飯田市教育委員会
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545
発行年月日	西暦1997年3月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゆかわ 湯川	長野県 飯田市 山本	2053		35度 45分 25秒	137度 45分 25秒	19950517 ～ 19950620	636	県単農道整備事業山本地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湯川	集落址	縄文時代 中世	竪穴住居址 4軒 土坑 11基 溝址 1本	縄文土器・石器  陶器		縄文時代中期後葉の集落を調査した		

---

---

ゆ かわ い せき  
湯 川 遺 跡

1997年3月14日発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印刷 飯田共同印刷(株)

---

---

